

---

# 生まれ変わっても負け犬

爪陽二

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生まれ変わっても負け犬

### 【Nコード】

N7659Q

### 【作者名】

爪陽二

### 【あらすじ】

魔法不能者。人々の生活の根底に魔法というものが存在している世界で、その烙印を背負ってしまった少女。

その内側は、負け犬人生が染みついた、こっちの世界のもので

脳内無双な敗北主義者の主人公視点で語られる、学園ネガティブコミカルファンタジー。

## (1) プロローグ 引きこもり負け犬の選択(前書き)

随時、文章の微修正を行なっております。

誠に申し訳ありませんが、ご了承くださいませ。

感想、批評、御待ちしております。

## (1) プロローグ 引きこもり負け犬の選択

負け犬、という人種をご存じだろうか。

それを端的に言葉に表すならば。

敗北者。

敗残者。

脱落者。

社会の落ちこぼれ、殻潰し、惨めな落伍者、人生の失敗者、屑、出来損ない、出来損い。

何とも耳に痛い言葉の羅列である。

ところで。

これの恐ろしいところは、一旦墮落してしまうと、這い上がることは困難を極めるところだ。

よじ登っても、よじ登っても、断崖絶壁。

這い出しても、這い出しても、泥濘<sup>ぬかるみ</sup>底無し沼。

そのうち、足を引っ掛ける窪みすら欠け落ちて。

そのうち、体を支える砂泥すら沈み落ちて。

いざ、奈落の底へ真つ逆さまの運命。

こうなったらもう足掻かない。

足掻けない。

自由落下の法則を遵守。負け犬は、基本的に数の暴力<sup>ルール</sup>には素直な人種なのだ。

落ちて落ちて。

落ちて落ちて落ちて落ちて落ちて墮ちて墮ちて

その奈落の底にも、また穴があるとは、さすがに思わなかったけ

ど。

その日も目覚めは、ノックの音だった。

乾いていて、尚かつ下腹に響くような、不快な衝撃音である。聞くだけで吐き気がするので、お得意の魔法とやらで、爽やかかつ軽快なインターホン音でも鳴らせばいいのに。

ともかく、その音の目覚め効果は抜群ではあった。すでに意識より先に、私の身体は行動を開始している。

習慣とは、しみじみすごいものである。人体の神秘。

ここでも同じ作りをしているかどうかは知ったことではない。

しょぼくれた視界をこじ開け、やたらとゴージャスチックな布団を跳ね除けて体を起こす。窓から横向きの日光が差し込んでいる。

早朝。

可愛らしい女もののスリッパ（特注品）を履き、床に敷かれた、金色の装飾があらわれた赤い絨毯を闊歩し、間もなくやたら鈍重な凸凹扉の前に到着。

がちやり、と鍵を閉める。

「あ、ちよつと、お嬢様!？」

扉の向こうから、何やら声が聞こえるが、きっと空耳であろう。私はそう判断して、復路を経てゴージャスベツトに再度潜り込む。ゴージャスとはただ見た目だけでなく、それに見合った素材を使っているため、抜群の肌触りである。寝っ転がれば、間もなく安眠間違いなしなのだ。

「お嬢様！ 鍵を外して下さい！ 今日入学式の日ですよ!？」

お嬢様！」

空耳と共に、不快な衝撃音が再開された。コンコンコン、と連続的な音は下腹に断続的にダメージを与え続ける。

……やはり、将来的にインターホンを設置すべきだと思う。いやむしろ私が作っても可。明後日辺り。

と、そのうちコンコン、だった音がドンドン、にレベルアップする。衝撃も伴ってグレードアップである。

空耳　メイドの声はまだ続く。

「お嬢様！　おじょーさま！　今日はこんな馬鹿やつてる場合じゃないんです！　初っ端からサボってどーするんですか！」

このままガンガンにクラスチェンジする確率は、統計上5日に1回である。一昨日がそれだったので、本日の安心度をつけるなら上位から2番目であることは確実

「お・じょ・う・さ・ま！？　いい加減にして下さいよ、欠席とかしたら、なんて言われると思ってんですか！　主に私が！」

ガンガンと、容赦なく扉を蹴り飛ばす音が聞こえてくる。

どうやら今日は厄日らしい。今カギを開けたら、すっごい不幸な事に遭遇するのは間違いない。挙げるなら、ものすっごい形相をした凄絶<sup>せいぜつ</sup>怪力鉄メイドに、首根っこ引っ掴まれて、着替えという名の強姦されるなど。

そついうわけで、本日あの扉の鍵が開かれることは決してないだろう。

そつと決まれば、この騒音と衝撃の中、どう紛らわすかの思考錯誤タイムである。私は布団を頭までかぶり、まずは物理的抵抗を試みることにした。

「あの、いや本当、今日はまじやばいんですよおじょーさま！　メイド長にも釘押されてるんですよ！？　首がかかっているんです！　こんなどーでもいい事に首がかかっているんです！　ああ、もうっ、この係りになってから私のメイド人生滅茶苦茶ですよ！　ばっきばきの全身全霊粉微塵ですよ！　こんな不幸な私に、少しでも同情し

てくれる程の良心の呵責<sup>かしやく</sup>を持つてたりするなら、開けちゃってもいいんじゃないでしょうか！ いや、開けて下さいお願いします！  
お願いしますって言ってんだろコラ！」

……だがしかし、とてもじゃないが睡眠状態に入るのは不可能だった。

かなり焦ってるのか、若干可哀想なほど本心を晒け出しながら、扉を蹴り続ける爆音が部屋に響き渡る。廊下にも響いているのは間違いない。

ちなみに、扉は魔法で強化された木材を使用しているため、いかに凄絶怪力メイドといえど、蹴り破るのは不可能である。一応と言いつつも、実は凄絶怪力鉄メイド命名の由来は、その無駄に頑丈な強化木材をへこませたことに由来しているのだが。

恐るべし、凄絶怪力鉄メイド。壮絶怪力鉄メイドにバージョンアップする日も近いと見た。

まあ、凄絶怪力鉄メイドのことはさておき。

本日の厄を強制回避するためには、まだしばらくの間は我慢するしかないらしい　と思つた矢先。

何の前触れもなく。

ふと、全ての音が止んだ。

「……え？」

予想外の出来事に、思わず口から疑問がこぼれる。

突然、本音ダダ漏れのメイドの恨み言と、ドアを蹴る音が消え、部屋に朝の静寂が戻っていた。

「……………」

布団から頭を出し、なんとなく耳を澄ましてみるものの、扉から、特に聞こえてくるらしき音は無く。

あきらめたんじゃないの？

いや、それは無いだろう。頭によぎった可能性を瞬時に却下する。

統計上、扉を蹴り始めた日は、結構な時間粘ることが証明されているのだ。過去1年間のデータより。

だったら、つまり、これは一体どういうことなのか

「……ロゼ？ どしたの？」

確かめるために、私はもっとも手早く、原始的な手段を取ることにした。

ベッドから降りて、扉に歩み寄る。

「おい」

呼びかける。

「ロゼット・アフテイ？」

フルネームで呼んでみたりする。

「……凄絶怪力鉄メイド？」

恐る恐る、あだ名を言ってみたりするが

「……………」

反応無し。

そうこうしてるうちに、扉のすぐ手前まで来てしまっていた。

扉に耳を添えてみても、何も聞こえない。

全く、聞こえない。

朝、この屋敷はメイド達が、慌ただしく駆けずり回る足音が廊下を揺らし、換気換気と、全ての窓をオープンする為、風の音が聞こえるはずなのだ。

ならば。

やはり、おかしい。

異常。

これは異常である。

異常。異変。変異。異質

「……………魔法……………！」

一瞬の迷い後。

本日、開けないと誓った扉を、今度は内側から蹴破るよう to 開け



る。

叫んだ。

「ロゼっ！」

その時の感情は、分類するならば、恐怖のカテゴリーに入っていたことだろう。

私は、ただひたすら、この異常な沈黙を打ち消したかった。そして。

「やあ、フエオちゃん？」

……………久しぶりに聞く、どこか捉え所の無い、のっぺりとした声。

気が付いた時はもう遅く。

がっしりと羽交い絞めされて、無理やり何かを嗅がされ、私の意識は地へと落ちていった

本日二度目の目覚めは、なかなか類を見ない起床だった。

まさに希少。……………なんちゃって。

現実逃避はさておき。

再々度、状況を確認してみよう。

屋敷の一室である。金の模様つき赤絨毯。凸凹の深い色合いの木製扉。汚れひとつ無い真っ白な壁。外開きの木枠窓。

私の部屋と同形である。だが、似たような部屋はいくらでもあるので、そのどれかは分からない。

唯一、判断素材にできそうな窓の外を見ようにも、立って、そこまで移動することが出来ない。

なぜなら。

先程、意識的に視界に入れないようにしてきた、自分の体を再々

度見やる。

縛られている。

何度見ても、振り向きざまに見ても、視線を逸らして見ても、完全無欠、一片の冗談もなく。

純白のパジャマの上から、か細い体を這うように縛られている。

「……………なに、これ……………」

底知れぬ不安。身の毛もよだつ悪い予感に、呟いた声もかすれていた。

一体これは、なんなんだろう。

一体これから、どうするつもりなのだろう。

縛られていることが問題なのではない。いや、もちろん縛られていることも問題なのだが。

この、動きを制限する縄。その縛り方。

名前は知らない。忘れた。だが用途ならよく分かる。

ええ、

よく分かる。元男だもの。前世男だもの。

「なにこれって、またまた。フェオちゃんったら、相変わらずむっつりさんなんだからあ」

先程の呟きに返答したのは、気絶する寸前に聞いた声。

声の聞こえた方向。いつの間にやら傍らに立っていたのは、久しぶりに見る顔。

その顔を見て、安心したのか、もしくは怒りが再燃したのかとにかく、なんとか声は出そうだった。

久しぶりの再会。言いたいことは山ほどあるが、とにかく、先じて言わなければならないことがある

大きく息を吸い込む。大声を出すコツは、喉よりもお腹で声を出す感じ、と誰かが言っていた。

人生二度目にして、初めての実践。

思いつきり、今現在の思いの丈をぶちまけた。

「 実の娘に、なんでこんなエロちつくな縛り方してるんですか  
っ！？！？」

「 ぜえ、はあ……」

慣れないことをしたためか、はたまた運動不足の賜物か。私はやや息を荒げながら、少しは叫んだ効果があるのかと、その人を睨みつけた。

が、しかし、その人物は耳栓をしていた手をゆつくりと放しながら、ごく涼しげな顔をしていた。「言いたいことはそれだけ？」とでも言いたげだ。

……この憎たらしく飄々<sup>ひょうひょう</sup>として捉え所の無いこれが、今の私の母親。旧家であるシュラプネル家六代目当主の妻、ゼノヴィア・シュラプネルその人である。

ウェーブがかった長い金髪。一切の肌の露出を許さない、気品溢れんばかりのドレスに、感情の読めない仮面。

さながら、金髪マネキンに観賞用ドレスを着せて、汚れが付かないように全身ビニールカバーで覆った感じ。

……ちよつと言い過ぎ。

とにかく、実に五年ぶりの再会。

「 いやあ、逃げないように縛ろうとしたんだけど、可愛かったんで思わず、ねえ」

……最低の再会シーンである。

「 ねえ、じゃないでしょうが。何の言い逃れにもなってないですよ」

「そう？ でも、わたしだって、ちょっとは我慢したのよ？ 本当はもつとすぐする気だったんだからあ」

変わらない表情で、おばさんちづくに、いやいやと手を振るお母様。

……もつと、すぐく？

非常に不安になる要素の強い言語<sup>ワード</sup>である。

「ど、どうする気だったんですか」

勇気を出して尋ねてみることにした。正直聞きたくないが、しっかり把握しておく、後々対母親戦で役に立つかもしれない。

私の問いに、お母様は満面の笑みを浮かべた。表面だけの、ぞつとする笑みである。

両手で拳を作り、それを顎につけて、可愛く首を右斜めに45度に曲げた。いわゆるぶりっこポーズである。吐き気がした。

そして、その次の言葉のショックで、その吐き気が木端微塵に吹き飛んだ。

「裸に直接？」

「……本当に、ちょっと我慢してくれて非常に幸いです」

どこの世界に五年ぶりに再会した娘を裸に剥いだ拳句に縛る母親がいるというのだろうか。

聞かなければよかったという後悔。とりあえず、どちらにしろこのデンジャラスお母様の前では、油断も隙も見せてはならないという今後の人生の教訓は、不動の地位を確立していた。

「やる気満々だったんだけどねえ。意気揚々とボタンを外したら、口ゼガフェオちゃんと全く同じセリフ言いながら、ものすごい形相で止めてきたもんだから、泣く泣くやめることにしたのよねえ」

……そして逆に、思わぬところで思わぬ人物の株が急上昇した。

……すみません、これからはちゃんと名前で呼ばせていただきます……

それにしても、確かにかなりギリギリセーフだったらしく、前開きの上着のボタンは、全て外れ、大きくはだけていた。

若干ずらされているものの、下着を着けているので、胸が全て露出しているわけではないが……

垣間見える白い肌と、縄で強調されている小ぶりな胸がなかなか扇情的だった。

「あらあ、フェオちゃんったら、もしかして縛られるの気に入った？ そんな顔真っ赤にして」

「えっ？」

口に手を当てて、「あらまあ」といった風にニヤニヤしと面白がるような目が私を見ていた。

……まずい。

「ち、違います！」

私は慌ててかぶり振って、「そんなことより」と言っ、瞬時に話題をすり替える。

そう。

少々脱線してしまったが、そんなことよりも、他にも言いたいことは山ほどあるのだ

改めて、母親の方に体を向き直る。

……なぜか、相変わらず縛られたままだけど……

「どういうつもりですか、お母様！ ここでは魔法は禁止だって言っただじゃないですか」

私はきつ、と睨み付ける。

推測が正しければ、あの不自然な無音は魔法によるものなのだろう。他の場所からあの部屋に一切の音が入らないようにする。あの

時は気付かなかったが、恐らく窓からの音も消えていたはずだ。

魔法とやらは、そんなことも出来てしまう

だが、その追及にお母様は、悪びれることなく少し首を傾げただけだった。

「ん？ そうだっけえ？」

「そうだっけって……」

私はこの惚けているつもりなのか、母親の言葉に絶句した。

忘れていたわけがない。そもそもこれを発案したのはこの人なのであり、許可したのもこの人なのだ。

「まあ、そんなことはどうでもいいじゃない。それより、問題はフエオちゃんの方じゃないの？」

「……どうでもいい？」

精一杯眼つけているであろう、私に気付いているのか、気付かぬふりをしているのか。

ここにきて、私は確信していた。わざわざこの道化がここに来た、その理由<sup>わけ</sup>。

だが、だとしても、分からない。

一体なぜ？

今更。

こんなことは今更である。

「今日は、大事な大事な、だーいじな、コンスタンティア魔道学院の入学式よ？ それなのにあなたは懲りずにまた引きこもって。メイドの手を煩わせて」

それを許したのは、誰だ。

「いつまでそうしてるつもりなの？ そうやって現実逃避したって、なーんにも変わらないし、なーんにも始まらないのよお？ それに、これは代々、シュラプネル家当主になる者の」

「嫌だっ！」

気付けば。

私は、絶叫していた。

聞きたくないことを、望まないことを、ありえない未来を、拒絶した。

「絶対に嫌だ！」

ぴくりと。

お母様の頬が引きつるのが見えた。化けの面が剥がれようとしていた。

「そんな そんなものはベリルに……妹に任せてればいいじゃないか！」

「……なんですって？」

ぴしりと また音が聞こえそうなほど、お母様の顔が豹変していく。作り物の親の顔から、使えない部品を見下す顔へと。

だが、私の絶叫はまだ止まらない。たかが外れたように、言葉の波が溢れ出す。

溢れ出るまま、吐き出す。

「魔法不能者の私に、今更あんな化け物みたいなところに行けっていうの？ 初等も中等も、ろくに行ってないのに？」

魔法不能者。それはこの魔法が人間の生活の根幹をなしている世界において、圧倒的弱者だ。

そんな生まれつきの負け犬が、群れに馴染めるはずなど、ありはしない。そんなことは、前の人生で分かりきった事。

「それ以前に私は家を継ぐどころか、この屋敷から出ることもすらままならないんだよ！」

この陸の孤島で五年間、私はずっと閉じこもっていた。むしろ生まれてから11年間、少しでも頑張ろうとしたあたり、私はどうしようもなく馬鹿だったのだらう。新しい世界に 新しい人生なら、やり直せるなんて。

「街じゃろくに生活も出来なければ、どんな弱い魔物でも襲われたら死ぬしかない！　なんの力もない出来損ないの私に、一体どうしろっていうの！？」

結局証明したのは、負け犬は死んでも負け犬だってことだけ。

もう二度と、惨めな思いはしたくない。

もう二度も、惨めな思いはしたくない。

だから

「だから……もう……嫌……」

全て。

一滴も残り残さず言い終えて

息を切らした私を待ち構えていたのは、憮然としたシュラプネル家当主の妻の顔だった。

見下ろしていた。

遠く遠く、高い所から、見下げていた。

「言いたいことはそれだけかしら？」

今度こそ

冷たく、凍てついた声。

平坦。鋭く、まっ平らな感情。

「既に馬車と、荷物はメイドが用意してくれているわ。後はフェオドル、あなただけよ」

その言葉には、一切の容赦すらない。

冷たい刃のような瞳に、射られるような錯覚。

「嫌だと……言いました！」

たまらず、私は視線を下げる。

……恐らく、今の私の姿は滑稽であろう。説教する母親の足元に縛られていながら、ヒステリックを起こしているのだ。

よもや滑稽以外の何物でもない。さらにここで泣いたら、滑稽にすらなくなる。私は下を向いたまま、はつきりと意志を告げた。

「……絶対に行きません」



そして。

「そう」

と、お母様はあっさりと

「じゃ、あなた」

あっさりと、突っぱねた。

「あなた、勘当ねえ」

あっさりすぎた。

何の感情もそこにはこもっていない。平坦ですらない。

ただ事実を語っただけ。

ただ真実を喋っただけ。

だからこそ、理解するのには一瞬の間がかかった。

「……………え？」

「だーから。勘当。クビ。シユラプネル家から、あなたを追いつていつてるの。いつまでも殻潰しを置いて置く程、あの人は甘くないわよお」

顔を上げる。見やったその瞳に、刃のような冷たさはない。飄々とした道化の、いつもの仮面をもう被っていた。

「か、勘当するって……………」

勘当。追い出す。シユラプネル家から。

この魔法という、私にとっての化け物が取っ払われた温室から。

……………仮面。五年前、私がその時の全てを、二度目の人生を諦めた際に作られた、母親の仮面。

一度は見捨てたはずの私に。

一度は情けをかけたはずの私に。

その母親は、今、実の娘にこう言ったのだ。

外でもう一度惨めに生き恥を晒すか、ここで命にすぎるのを

止めるか、選べ

## (2) ひねくれ負け犬の初登校

負け犬とは、諦めることと見つけたり

「さっすがフェオちゃん！ 分かってくれるって信じてたわあ」

……負け犬。

それは敗北者。

それは敗残者。

基本的に親の権力には逆らえない人種なのだ。

つまり。

つまり、私に選択権などあるはずもなく。

つまり、私に拒否権などあるはずもなく。

「……いいから、早くこの縄を解いてくれませんか……」

再び、吐き気を催すぶつりこポーズで、取ってつけたようなはしやぎ方をしている母親に、私は心底嘆息しながら懇願した。

いい加減痺れが酷いことになっている上に、主に元男として、この状況は非常に精神的都合が悪いのである。

「うんうん、遅刻なんかしたらダメなものねえ。すぐお着替えしましょうねえ」

お母様は大仰に頷くと、私の傍らに腰を落とし

今、ようやくと縄が解かれ始めた。

「ふん、ふん、ふーん」

「ふんふん、ふふふん、ふふふーんふん」

「……………」

鼻歌などしながら、やけに手慣れた様子で解ほどいている母親を、私は色々と複雑な思いで眺めていた。

あの人　お父様の顔を思い出して。

……………　気持ちが悪くなつて、急いで掻き消す。

なんて想像をしているんだ、私は。

「　　つと、足取れたわよお」

「……………え、あ、うん」

気が付くと、足の拘束が解かれていた。作業をし始めて、数分と経っていないのではなからうか。

果てしなくスピーディである。

「……………」

とにもかくにも。

私はしばらく血流が滞っている足を伸ばそうとして。

「うあ!?!」

思わず、悲鳴を上げる。

勢いよく循環し始めた血管が、痛みにも似た痺れを与えてきたのだ。

「い、いにやつい!?!」

たまらず赤い絨毯に横たわってしまう。頬に柔らかい感触が当たった。

……………私は基本的に、恐ろしいほど痛みに対する堪え性が無いのである。

「あらあらあ。大丈夫、フェオちゃん?」

いきなり倒れこんだ私を、抱え起こしにかかるお母様。

「だ　大丈夫です。ちよ、ちよっと待ってください、すぐ起きますから」

応えて、完全に曲がり切ったままの足をゆっくりと伸ばしていく。じわじわとした痛みと熱っぽい感覚。私はたまらずびくん、と体

を跳ねさせた。

どたっ！ とお母様の手から落っこちて、再度レッドカーペットに激突する。

そのまま転げまわった。

「いたたたたたっ！」

私は未だ上半身を縛られたまま、ぐるぐると絨毯の上に身体を転がしつつ、情けないことに涙目になっていた。

痛い。無理。我慢できない。

ごろごろと絨毯の上を転がって痛みを紛らわす。

……5年間の引きこもり生活で、忍耐という概念を身体が完全に捨て去っているようだった。

引きこもり負け犬VS痺れ。

完敗である。

「あらあらあ、フェオちゃん、痺れぐらいで大げさねえ」

「うっうっ……」

のっぺりとした声に返す言葉もない。

聞いた私の額には脂汗が滲んでいた。

「……………いえ、ちよつと絨毯が柔らかそうだったんで、痺れついでに転がってみただけです」

何に対する言い訳なのか、気が付けばよく分からないことを口走っていたりする。

「と、とにかく、立てそうにないので、このまま縄外してくれませんか？」

「あらあ、そう？ 解きにくいけど、仕方ないわねえ」

言っと、お母様は部屋の隅に転がっていた私に近寄り、上半身の縄を素早い手業で解いていく

「お母様？ ……どうしたんです？」

はずだったのだが、へそ辺りの結び目（そこから解けるらしい）に手を添えたまま、お母様は静止していた。

……かと思えば、突然動きだし、私の顔の覗き込むように身を乗

り出してきた。

「フェオちゃん」

妙に生真面目な顔で言う。

「は、はい」

反射でこちらも素直に返事してしまう。

ずいっ　とまた身を乗り出してくるお母様。

「わたしねえ、夢があるの」

表情そのままに、どこか遠い所を見据えていた。

「……夢、ですか？」

なんだか　なんだか、嫌な予感がする。

「うんうん。昔からの夢なんだけどねえ」

たらりと。

背中に汗がつたる。

ところで、攻撃色という言葉をご存じだろうか。

ようするに威嚇のことなのだが

猫であれば、尻尾をぴん、と立てて毛を逆立てたりする、アレである。

これを人間に置き換えてみよう。

一つは単純に怒り顔。簡単である。他には暴力を連想させる、ものや行動。睨み付けたり、怒鳴ったり、殴る素振りなどがこれに当たる。

そして、番外として。

……笑顔。

笑みである。

「うふ、うふふふ」

笑っていた。

嗤わらっていた。

手に、汗が滲む。

……危険。

もはや米粒ほどにまで縮小していた、野生的本能が危険を訴えていた。

なぜか手がわきわきと開いたり閉じたりしている。いつもの仮面顔の瞳の奥に、明確な意図が透けていた。

「お、お母様……」

何か

何か、手はあるか。

状況を確認。

状態を確認。

手は縛られて動けない。

足は痺れて動けない。

窓は高く登れない。扉は閉まって開けない。そういえばなぜか音が不自然に聞こえない。

ない、ない、ない

……逃げられ、ない。

「あは、あはははは」

乾いた笑い声。

絶望の足音。

鼻の先に満面の笑み。

楽しそうに

本当に楽しそうに、お母様は夢を語った。くねくねしながら。

「成長した可愛い娘を、嫌々剥いたり縛ったり、着せ替える事なんだけどお」

随分と限定的で刹那的な夢を語りながら、その魔の手が伸ばされて

「いやあああああ!？」

絶叫は、誰にも届かなかった。

「ま、まあ、その。な？　なんというか……犬に噛まれたと思  
つて、気を取り直して……」

ところ変わって、馬車の中。

がたんつ　と石でも乗り上げたのか、一際大きく揺れた。

木製の馬車。黒い革製の日光除け簡易天井。車輪は4輪。外から  
見ると、血のように真っ赤に染められた車体に、金の飾りをこしら  
えて、真っ黒なスポークをくるくると回転させているという、如何  
にも目立ちたがり屋なデザインをしている。

外装同様、無駄に金がかかってそうな黒いソファに腰かけている  
私、その対面に座っている燃えるような赤髪短髪の男が下手糞な慰  
め方をしていた。

「ほら、今から入学式って、新しい門出が待ってるんだから、そん  
なふて腐れてると　」

「別にふて腐れてなんかない」  
遮るように私は無感情で言い放つ。

赤髪の幸薄そうな顔が困惑にひきつった。

「い、いや、だから機嫌直せって、な？」

「別に機嫌悪くなんかない」

「ほら、笑顔笑顔！。顔がなんか、死んでるぞ？」

「生まれつきだから」

「……………」

馬車に乗ってから、ようやく黙り込んでくれた赤髪。

別に、ふて腐れているわけではないが、今は誰とも話したくない  
気分なのだ。

その後



私は二次性徴を終えてから、母親に強制的に下着から制服までの着衣を着せられるという辱め　それだけではないが　を受けて、馬車へ放り込まれたのだった。

その馬車にあらかじめ乗車していたのが、この赤髪短髪に、不幸さ漂う顔付きのイヴァ・イルである。

私の幼馴染とも言える人物で、天涯孤独のところをシュラプネル家に引き取られ、実家の方に住んでいるのだ。

……母親同様5年ぶりの再会。昔からなにかと気配り症で、それはどうやら相変わらずらしい。

私と同じくしてコンスタンティア魔道学院に入るらしく、それならとお母様と一緒に迎えに来たそうだ。わざわざ遠方までご苦労なことである。

そして

もう一名、お知り合い。

「……お嬢様も、そんな顔する事あるんですね。初めて知りました」  
イヴァの隣で腕組みなどをしている人物。

黒髪。ポニーテイル。　メイド服。

ロゼ。ロゼット・アフティ。凄絶怪力鉄メイド、その人だった。

「どんな顔よ」

視線を投げかけ、先刻と同じように出来る限り感情が出ないように、聞き返す。

「そうですね。可愛らしくほつぺたなんか膨らまして、いつものひねくれっぷりを具現化してるかの様な面とは大違いです」

きっぱりさっぱり、ロゼは皮肉を隠すことなく言い切った。

「……ロゼ、実は私のこと嫌いでしょ」

「嫌われてないでも思ってたのならば、普段のお嬢様の言動と行動と思いつきによって私が被った事例を、今ここで再現してみましようか？」

嫌われていた。

完膚なきまでに、嫌われていた。  
まあそれもそのはず

このたび、彼女も学院に入ることになってしまったからである。  
曰く、「お嬢様のお守を奥様に頼まれた」だそうだ。……私は全く知らなかったのだが。

こうなったのもロゼが元々、有名な魔道士家系の出身で、その中でも天才、などと言われちゃってたりしたことがあり、尚且つ年も一番近かったからである。

だが当の本人は、それが嫌で当時の学校を中退、家出して（すごい根性である）、憧れだったというメイドさんとして生活していたのだ。

ここにきて、魔道学院にトンボ帰りである。

本人の弁を借りるなら、「メイド人生、ばっきばきの全身全霊粉微塵」である。ご愁傷様。

「はあ……」とロゼはため息をついて、流れゆく景色を眺めながら、  
「私、メイドとしてシユラプネル家に仕えたはずなんですけど……いつ、お嬢様専属守護隊長になったんでしょうか……」  
と、どこか哀愁を漂わせながら、ぼつりと呟いた。

ここで、コンスタンティア魔道学院について話しておこう。

世界最高峰と名高い魔道士育成機関。

基本的に全寮制。完全実力主義。

世界最高峰難易度の入学試験。卒業者には数々の伝説の魔道士。

その実態は、金さえあれば裏入学できる金持ち達の独壇場。  
評議会と呼ばれる政治機関の構成員、そのご子息さん達による未  
来社会の縮図。

……どこの世界も、突き詰めればこんなものである。

そんな、策略謀略飛び交う学校という名の閉鎖空間に

「到着、ですね」

「フェオ……大丈夫か？」

「ここまで来たら、もう腹くるしかないでしょ……」

長い、長い道のりを経て。

血塗られた、赤い箱舟から足を下ろす。

……ゆつくりと。

転ばないように。

こつん。

道に敷き詰められた大理石の一つに、茶色の革靴、その片方の底  
が今、足跡をつけた。

まもなく両足がその上に乗っかる。

「まあ、もう仕様がなから」

下から。

黒いルーズソックス。

グレーっぽい色に控えめな赤っぽいラインの入った膝上ミニスカ  
ート。

白いブラウスの上に、ミルク色のセーター。

紺色のブレザー。右腕上腕に、『祈りを奉げる魔女の横顔』のエ  
ンブレム。

襟に真っ赤な大き目のリボン。

はるか古代、存在した国、伝統の民族服、そのコピー。  
らしい。

……あほらしくて、突っ込む気も起きない。

そして それを着こなす人物。

肩までの、母親譲りの緩いウェーブがかった、淡い色合いの金髪。  
透明な翠色<sup>みどり</sup>の瞳。

過去一度も、日焼けをしたことがない白い肌。

柔らかな、それでいて凛々しい、寸分の隙もない顔立ち。

絵に描き表せない超絶美少女。

内面とは真逆<sup>にりつはいはん</sup>。二律背反。

欠陥<sup>うっけん</sup>と、完全<sup>おもて</sup>。

「……精々、恥を晒してやるよ」

一匹の、魔法不能者<sup>まけいぬ</sup>が、放たれようとしていた。

### (3) 大注目負け犬の乱闘騒ぎ

「……ふーん」

馬車を降りて少々道なりに歩いた所。  
見上げて。

眺める。

私の背の二倍ほどもある壁はこの先もずっと続いていた。威圧感たつぷりの両開きの巨大な門は、すでに開かれている。さながら城壁を思わせる。いや、用途はそれと同じ意味を持っているのだらう。門の横、長大な壁にごくごく小さな紹介文。「コンスタンティア魔道学院」の黒地に金色の文字は、昼下がりの斜光を浴びて、なんとかぎりぎりの存在感を放っていた。

ここが今日から通うことになる、いく度目かの化け物屋敷<sup>がっこう</sup>。

魔法の巣窟。

「ほえー……」

……と若干実は緊張気味な私の横、間抜けな声がした方を見やる。  
「なんであんたも驚いてるの」

言われてイヴアは頬をポリポリと掻いた。

私と同じような制服を着こんでいる。もちろんスカートではなく、同じような色合いのスラックスだ。

「いや、実は俺も見たのは初めてなんだよ。あんまりこっち来ると無かったし」

「徒歩20分ぐらいの距離でしょうが。あと一応言っとくけど、これでも私は初めてじゃないからね。小さい頃何度か連れてかれたんだから」

嫌々、無理やり、だが。

言葉の裏の意味が読み取ったのか、彼は苦笑した。

「まあお前ほどじゃないけど、こういうところは嫌いだからな」  
皮肉げに言う。

どうやら彼も、彼自身が決して望んでここに来たわけでは無いらしい。

大方、ロゼと似たような理由なのだろう。昔から拾ってもらった恩　後ろめたさがあるためか、イヴァはお父様達の言いなりになることが多い。

お互い、ままならないものである。

「それにしても、すごいですね」  
後ろからロゼがぼそつ、と呟いた。

「そつ、ね」

振り向かず同意する。

そつ、すごいのだ。

私達の注目度が。

ぼけー、と田舎者の様に、門の手前と真ん前（かなり邪魔である）にただ突っ立っている私達だが、なにもここにいるのは私達だけではない。

なにしろ、入学式である。

だてに世界最高峰を謳っているわけではない学校、その入学式である。

在校生はもちろん、新入生、その親達、政治関係者の方々、OB  
そんなところか。

様々な人達が、門の内側に吸い込まれて行く。

その通り道を完全に両脇に追いやっているのは、他でもない私達  
3人である。

立ち止まる者、見る素振りを見せない者、蟹歩きで通り過ぎていく者。

いずれも囲むように、または避けるように、出来上がったのは不  
自然な無人空間。

……大注目だった。

「私がかわいいからかな」

「……相変わらず自分の容姿にだけは自信たっぷりですね。その調子で内面もより一層美しくして頂きたいものです」

ちよっとした冗談に嫌味たっぷりに突っ込んでくる口ゼ。極端に焦ると地が出るが、基本的にいつもこんな感じのキャラなのだ。

凄絶怪力鉄メイド。一般的な主従の関係とは程遠い。

ちなみに彼女は私と同じような制服を 着ていない。何故かメイド服のまま。

わざわざ指摘してあげてもどうせ聞く耳を持つはずがないので、完全にスルーしているのだった。

ところで何故こんな目立ってしまったのかというと、それはあの目立ちたがり屋な馬車に問題があったのである。

只でさえ目立つデザイン シュラブネル家はあいつたド派手な赤色を好む だったが、それだけでは無く。

気付いたのは馬車を降りて、御者をしていた屋敷のメイドを見送った後。走り去る馬車の背。描かれていた、何の変哲もない一本の剣。

……家のシンボルマークだった。

全く、これっぽちも自慢ではないが、シュラブネル家は超ド級に有名だったりする。

長い間引きこもっていたので、有名人精神旺盛の親が、自分の娘をひたすら万人に晒したがる事を完全に忘れていたのだ。

というかその被害にあっているのは、もっぱら妹のベリルだったので、まさか私もやられるとは思いませんでしたのである。

「俺は完全にとぼっちりだな……」

何やら被害者面で、恨み言のようなことを言うイヴァ。

私だって、目立ちたくて目立ったわけではないというのに。

目立つことは、そのまま死に繋がる。

少々、大げさかもしれないが、学校という閉鎖空間はそういう所である。引用、これまでの人生データ。

異質を排除。

特異を消去。

人間に擬態できなければ、負け犬二度目の人生、バッドエンド。

魔法学院に魔法不能者が行つて、擬態できるか否か

脳内シミュレーションして、泣きそうになった。

「……いいじゃない別に。むしろこの注目度を有効活用して、めばしい子片っ端から告白したら、シユラプネル知名度パワーで一人ぐらい付き合えるかもしれないじゃない。勝手に幸せにでもなつてなさいよ、別に怒らないから」

「……何で怒ってるんだよ」

「別に」

私はそつけなく言い放ち、いつまでも校門を通りにくくしても仕方ないので足を進めた。突然の無人空間区域の移動に人波がざわざわと揺らぐ。

実はこのままでは足がつりそうだったのは、内緒である。引きこもりはつくづく体に悪い。

「イヴア様。お嬢様が『別に』を連呼した時は、いじけて弱っているサインなので、畳み掛けるなら今がチャンスです」

「え？ あ、ああ」

……歩き出した私の後ろで、口ゼが何やらいらんことを吹き込んでいた。

城壁の中も同様に威圧感たっぷりな建築物があらゆる所に鎮座していた。

私の屋敷のように、ただお金かってそうというだけではなく



言つなれば機能性を求めたかのような。

無駄な飾りや突起を取つ払つたと言ふべきか、主に煉瓦作りのような。詳しいことは私には分からない。角張つた輪郭は要塞を思わせる。おそらくまた魔力でも込められており、『外からダイナマイトで爆破しても、傷一つつかない素敵要塞』というオチである。魔道士という人種が好きそうなフレーズである。

その素敵要塞達　校舎達のちょうど中心部。辿り着いたのは、巨大なドーム型の建物だった。

「……これ、覚えてる……」

それはおぼろげな記憶の中で、強く印象に残っている建物だった。先程の校舎とは打って変わっておしゃれ建築物。円形の外縁に、柱が規則正しく並べられている。その柱で支えるようにして、上からドーム状の屋根を被せていた。

そのドームはただなだらかなアーチを描いておらず、直線だけ造られているような段々を作っており、上昇するにつれてそれは徐々に細くなっていく。

そのてっぺん、一番細い所に立っている一体の女の像。

まるで天に祈願するかのように、両手を掲げて空を仰ぐ長髪の女。学院のエンブレムにも描かれている、魔女コンスタンティアの像である。

「はぁ……」

一層深まっていく『魔法』と『学校』という名の雰囲気、私は憂鬱さを吐き出すようにため息をついたのだった。

「ところで、代表の言葉はしっかり考えてるのか？」

「……………ふえ？」

ドームに入つてすぐ。目立たないことを負け犬らしく諦めた頃のこと。

イヴァのその言葉は私にとっての余命宣告にも等しく、これからの学校生活、入学式を終えてから一週間生き延びることが出来るのか、実は屋敷を追い出されてどっかの魔物にぽっくりとやられる方を選択した方が、まだ長生きできたかとも思わせるには十分すぎた。「新人生代表の言葉。ほら、初等の入学式の時もやっただろ？　まあ、あの時とは規模が桁二つ違うけど」

こちらの気も知らず平然として軽い口調のイヴァ。

私と言えば、その場で足を止めて固まっていた。

……………聞いてない。

そんなこと、聞いてない。

なんで？　騙された？　誰に？

「ん？」とイヴァも足を止める。ロゼは振り向かず人ごみに入り行く後ろ姿が見えた。

「どうしたんだ？　おい。フェオ？」

怪訝そうにイヴァは私の顔を覗き込み、目の前で手を振ったりしていた。

私が立ち止まったため、比較的広い通路が一気に狭くなり、後ろでは交通渋滞が発生していた。

だがそれでも私は全く動けず。

何か大きくてどろどろした異物を、胃の底から嘔吐しそうな錯覚。胃の底から飛び出すような感覚。

「おい、どうしたんだよ？　ほら通路が詰まってるから」

イヴァは私の背後を見やりながら、少し強い口調で諫めるように言つて

ふと気付いたように手をぽんつ、と叩いた。

「……………あのさ、もしかして、考えてないのか？」

「」

後方から、いきなり混雑し始めて困惑したのか『何だ何だ』と騒いでいる声が聞こえる。

前方では、引き返して何事が確かめようとする野次馬が表れていた。

ここでようやく、私に限界が訪れる。

「あ」

「……おい、やっぱり考えてなかったのか。どーすんだ、後20分と無い」

「あんの陰湿肉欲工口魔人があああつ！」

叫んだ。

力の限り、叫んだ。

叫び終わって

沈黙。

目の前にいる赤髪も、後ろの騒ぎ立てていた魔道士達も、前で聞き耳を立てていた野次馬達も。

沈黙。

皆が皆、黙りこくって辺りは静寂に包まれていて

その静寂を破ったのは、やはり息を切らしていた、私だった。

「帰るっ！」

勢いよく踵を返す。後ろの混雑地帯が道を開けようとして開けられずに、一部ドミノ倒しになっていた。

だがそんなことお構いなしに 気付かずに、私は大股で往路を引き返そうとして。

「ちょ、ちよつと、フェオ!? おい！」

がしっ と後ろから手を掴んだのはイヴァだった。

「帰るって、ここまで来て帰るのはさすがにないだろ! 腹くくつたってさっき言ってただろうが！」

私は掴まれた腕を振り解こうとぶんぶん振り回すが、さすがに男の力に女の力(プラス引きこもり補正)、まるで外れない。私はも

う、やけになっていた。

「いやっ！ 帰る！ 絶対帰る！ あのセクハラ母親仮面の鉄面皮に一発蹴りかましてから、一日でも長生きして死んでやるうっ！」

「待て！ 落ち着け！ 早まるなあ！」

……………夫婦漫才よろしく、私達は叫びながら腕を引つ張り合っていた。

周囲は、どの顔も呆氣にとられたかのような表情をしている。

名家、シユラブネル家。大衆の面前で駄々をこねまくっていた。

と。

「こちらです」

突如、野次馬サイドが真つ二つに割れた。

そして現れる人影。

「……………ん？」

「なによ」

思わずイヴァとの取っ組み合いを中断して、その人影に目線を送った。

その人影は、1、2 計4名。先頭がそれを導くかのように、数歩先を歩いていて。

「……………ロゼ、何してんの？」

「いえ、どうせひねくれ我が儘お嬢様の事ですから、こんなことになるだろつと予め先手を打っておきました」

淡々と先頭を歩いていたメイドが応答する。

その後ろから彼女を追いついて、こちらにさらに歩み寄る人影の一つ

端的に初対面イメージを語るなら、前時代映像的白黒世界の住人かと思えた事を挙げるだろう。

色の無い肌に、すらりとした細身。光沢のある銀髪を腰まで伸ばしている。格段珍しくない黒い目が、組み合わせも相まって逆に印象を強めている。

私と同じように学院指定の制服を着ているが、左腕の上腕、学校のエンブレムと対称に何かのマークが縫われていた。

「こちら、ホワイトヘッド家のご令嬢。アナスタシア・ホワイトヘッド様です」

紹介されて、その女は小さく会釈した。顔には何やら怒気に近い不満が張り付いていて。

「新入生代表の言葉、代理としてやって欲しい、とその従者から聞いたんだけど」

と、ロゼを顎でしゃくる。

「……ホワイトヘッド？」

さりげなく居住まいを直していた私は、誰ともなく呟く。

直訳すると白頭でいいのだろうか。何とも面白みのある家名である。命名者とは気が合いそうだ。

だがしかし、人を顎でしゃくれるような人間とは永生的に周波数が合わないと思い、私は白頭ではなく、ロゼの方に事情を聴くことにした。

「ロゼ、どういうこと？ この人誰？ 代理なんかできるの？ ホワイトヘッドって白頭って直訳していいの？」

「……お嬢様。あなたはもう少し、場の空気と発言の是非を的確に判断するように心掛けた方が色々身の為になると思うのですが」私の問いに、珍しく冷や汗など垂らしながら焦りを滲<sup>にじ</sup>ませるロゼ。メイドのクビ関係以外で慌てた素振りを見せるなど、初めてで新鮮な気がした。

とにかく、ありがたい忠告通り場の空気とやらを讀もうと、白頭の方を見やって

「……………、……………」

背中にオーラなどが見えそうなほど、真っ赤に、明らかな憤怒の表情を浮かべた女が、握り拳を作りながら直立していた。

「え、えーっと……………」

やはり私のせい、なのだろうか。

……白頭、いい名だと思っただけ。

（バカっ、なんでわざわざ挑発するんだよ！）

耳元で小声の怒鳴りを上げるイヴァ。彼も何やら焦っているようだった。

周囲のギャラリーも、彼と似たような顔をしている。いや、

より一層恐怖が入り混じっているようにも見えた。中には好奇心を浮かべている者もいるが、それはごくごく少数である。

……どうやら状況を把握してないのは私だけらしい。

なんだが、途端に不安になったので、横のイヴァに尋ねてみることにした。

（あのー何がどうなってるの？　なんであの女が怒って、みんな怖がってるの？）

（……………お前、もしかして知らなかったのか？　シュラプネル家のくせして、知らなかったのか！？）

「いにやつ！？　ちょ、ちょっと！　苦しい！　苦しいってば！」

すごい形相でイヴァが私の首を絞め始めた、その時である。

ぱんっ！　という、何か衝撃音のような、破裂音のような

とにかく、けたたましい音が廊下に走った。

それが一体何の音か、確認する前に。

「あなた　シュラプネル家の人間が、わたしに喧嘩を売るとはい度胸してるわね……………」

細々と、だが根深く響く声で、女が言った。

その女の立っている、その床

床が、不自然にへこんでいた。

……………魔法。

「っ！」

魔法。

異質の力。異能の力。

違う。

異質なのは。異能なのは。  
魔法不能者。

……圧倒的、弱者。

そして、女の手の平が、私に向けられていて

「やめろ」

すぐ遮られた。

眼前に、腕。

「……………」？

イヴァの腕が、女の手と私の間を、遮っていた。

「こんなところで、こんなことで、魔法を使う気か。正気の沙汰じゃない。ホワイトヘッドの名が聞いて呆れるな」

「な　なんですって!？」

激昂する女。

その様子を、彼は冷静に見据えていた。

鋭い目つきが、女を射止めていた。

……まるで別人。先程まで私と馬鹿をやっていたのとは、まるで別物。

イヴァ・イル。

シュラプネル家に拾われるほどの、才能ある魔道士の卵。

知っていたはずの人が、いきなり遠くに行ってしまったかのような。な。

身近だった人が、別人に変わってしまったかのような気がした。

ざわっ。

ようやく事態が呑み込めたのか、付近の観客が一斉にざわめき出す。

「　　つく!」

女の判断は早かった。

衆目から逃げるように、女とその連れ達は颯爽と元来た道を引き

返していく。

その後ろ姿に取り残されるようにして。

……ぺたん。

腰が、抜けた。

「お嬢様!？」

女の子座りで冷たい廊下に沈んだ私に、慌ただしくロゼが駆け寄ってくる。

「お嬢様!？ 大丈夫ですか!？ ごめんなさい、私、わたし、こんなことになるなんて思わなくて」

焦りすぎて地が出ていた。

いつもこうだったら可愛いメイドさんなのに、などと私はのんきなことを考えて。

……人々の喧噪は、しばらく止みそうになかった。

その後、学院の教師らしきものが現れ、必死に騒ぎを収めていた。

あのホワイトヘッド家とやらは、どうやらシユラプネル家と浅からぬ因縁らしかったそう。詳しいことは知らない。

ともかく色々と事情を聴かれ、入学式の後に呼び出しとのこと。

その間、私はなんだかぼんやりしていて、半ば無意識に入学式の会場へと向かっていた。



(4) 悟り開いた負け犬の入院式(前書き)

2 / 1 1 1 8 時に前回の改訂をいたしました。

アナスタシアの口調、仕草の変更、特に最後の場面のフェオの内面描写(地の分)等の改訂が著しいです。

誠に、申し訳ありません。

#### (4) 悟り開いた負け犬の入院式

魔法。

この世界において人間の生活の根幹をなしている技術。

魔力。

それは魔法を生み出す概念。

それは魂アニマとも生命マナとも呼ばれ、あらゆる全ての物体に存在しているという。

人間は自らの魂いのちを以て、外部の生命いのちに作用し、魔法を生み出すという。

ここで、規格外の話をしよう。

もし、魂アニマとやらをもたない生命体がいたとして、その生命体はその世界で一体どういう不都合を受けるのか。

人が当たり前に火を起こせる中、せつせと枯れ木を集めて原始的な火起こし。燃料などその世界ではありえない概念。『大昔の昔、そういう時代がありました』と、初等学校の教師が歴史として語っている程度。

人が当たり前にちぎれた腕を繋げる中、ただ悲鳴を上げながら出血死を待つばかり。医療などその世界ではありえない概念。他人が治そうにも、その生命体には操作するべき魂いのちがない。

……なにより、その生命体はこの世界に生まれ落ちておきながら、無駄に前世のことを引きずって、魔力と魂アニマが別物だということを深く僻見へきがんし、その世界のあらゆる理ことわりと自分が別物だということを強く自認し、生まれ変わりなど有り得る筈のない馬鹿げたことだと酷く嘲笑し。

人間は、少しでも数の暴力ルイールから外れた者を排除すると強く信仰していた。

「うふふふ……」

とんだ負け犬。

とんだ敗北主義者。<sup>まけいぬ</sup>

だが、今更考えを変えるにはもう遅すぎた。  
手遅れ。末期。獣医も黙って首を振る。

「うふふふふふふ………」

「ふえ、フェオ？ ど、どうしたんだ、いきなり真顔で笑い出して。すごく怖いんだが………」

「イヴァ様。それは耐え難い現実から身を守る為のお嬢様式防御法の一つです。外部からの接続を断ち切っておりますので、今の内に胸でも尻でも好きなだけ弄<sup>もよぶ</sup>って下さいませ」

「い、いや そ、そんなことしないって」

「しないんですか？ 勿体無い。中身はアレでも身体はエロエロ一級品なのに。 ほら、このように大分物足りない氣もしますが、弾力性は中々と極上品」

「ちょ、ちよつと！？ ロ、ロゼ、やめとけ、やめとけって！」

「ロゼ、あんた本当に私のこと嫌いだよね」

セーターの中に突っ込んで、私の胸を揉んでいた手を掴むと、「あら」とロゼは少し驚いたふりをしていた

「おかえりなさいませお嬢様。そんな顔を真つ赤にして、氣持ちよかつたんですか？」

「……あんたへの怒りで、こうなってるのよ………」

睨みつけても平然とした顔で、私の服から手を引き戻すロゼ。

先程の可愛らしさはいずこへ、いつもの憎たらしい凄絶怪力鉄メイドに戻っていた。

入学式場。ドーム型の建物の中心部に位置する、外見そのままのドーム状のホール。

中心の舞台を囲むように椅子が並べられていて、舞台に一番近い所から、新入生、在校生、親。番外として教師、来賓という名のゲストが、新入生のさらに内側に入っている。

同じ枠の中では、どこにでも座っていいことになっていたらしいのだが。

事情聴取の後、私達が少し遅れ気味に入場したところ（まだ始まってはいないが）、なんと特別席が用意されていた。

一番先頭、横並び三席　なぜか周囲と離れている。その舞台挟んだ向こう側、アナスタシア・ホワイトヘッド並びにご家族ご親族の方々の縦列。後ろ側の保護者席、当然来てたらしいお父様とその親戚の方々。

……本当に因縁浅からぬ仲だったらしい。それに完全なる公認。

「ロゼ。あんた何考えてあの女連れてきたのよ……」

呆れるしかない。

右隣に座っているロゼに、心底呆れているのが伝わるように私は愚痴った。

「……すみません。その件に関しては、完全に私のミスでした」

すると殊勝にも彼女は謝罪の弁を述べた。

「天敵だからこそ、お嬢様のひねくれ口先八丁で代表を交代できるかと思っていたのですが、引き籠もりの世間知らずぶりを少々舐めていました」

「……天敵だからこそって、どういう意味よ」

引きこもり以下はスルーで進行させていただく。　ひねくれ口

先八丁もか。

ロゼは短くため息をつき、説明を続けた。

「あれは代々、入学するその時々のも最も強い権力者の子息が行う、一種の伝統のようなものです。つまり今年は、我らがお嬢様の番だったという事です」

………そこまですごかったのか、家は<sup>うち</sup>。

なるほど、確かに言われてみると、ただ私のためだけの温室にメイドさんが計10名いたり、幼い頃、さんざん初等学校で負け犬っぷりを晒していたことが、その学校内だけの噂で収まっていたのも、それが関係してたりするのもかもしれない。

この魔法社会、権力というものはどうやら絶大のようである。

ロゼの説明は続く。

「そして唯一、他でお嬢様と肩を並べることができるホワイトヘッド家のご令嬢なら、しらばっくれて代理を頼めるかと思っていたのですが、どうやら挑発だと取られてしまったようですね」

「ふーん……」

挑発。

『白頭』と言った事が原因ではなく、代理を頼んだこと自体が生徒代表の言葉など、どうでもいいと語っている私の態度が。……そんなことで、死にそうになった。

「それにしても、意外でした」

ふと、ロゼは付け加えるように言った。

「屋敷ではいつも傍若無人なお嬢様が、あんなにも怖がつているところ。私、初めて見ました」

意外なことを言う、ロゼの表情はどこか重かった。

先程の自失していた私の面でも思い返したのだろうか。どうせ滑稽な馬鹿面をしていたことだろう。あまり思い出さないで欲しいものである。

私は自嘲ぎみに苦笑した。

「なんのために、あの屋敷おんしつに5年間も引きこもりしてたと思っ  
てんのよ」

いつだって。

どこでも。

なんでも。

「魔法が、死ぬほど怖いからに決まってるじゃないの」

これまでの要約。

お母様に嫌々この学院に来させられた私は腹をくくって、出来る

だけ目立たないようにして細々と恥を晒そうと目論んでいたところ、一番の権力者であるシュラプネル家の娘だと言うことで衆目の大目玉を食らい、そのせいで世界最高峰を自称するコンスタンティア学院の生徒と親達と関係者の前で演説させられる羽目になり、それを代わって貰おうとしたところなにやら危うく魔法で殺されそうになり、しかも結局代表は代わって貰えずに今。

ここで、入学式が始まるうとしていた

代わり映えしない、式典だった。

どれだけ人間が居ようとも、どれだけ金持ちが居ようとも、結局やることなすこと根本的には何にも変わらない。

開式の言葉。学院長の挨拶。来賓様のご紹介。在校生代表の挨拶。次。

『次は新入生代表の式辞です。代表者の方、お願いいたします』  
マイクも拡声器も無く響き渡る声が、私を呼んだ。名前を呼ばない辺り、ちよつとしたサプライズ演出のつもりだろうか。

ならば。

超ド級、目立ちたがり屋シュラプネル家一族の一員としては、こんなさり気なく味気ないものより、もっと派手なサプライズを好まざるを得ない。

つまり。

『代表者の方？ 舞台の方へお願いいたします』  
司会が私の方に戸惑いの視線を投げかける。それ以外の方々も私の方を窺っていた。

未だ、一向に動く気配のない私の方に。

「フェオ……」

なぜか、いつもこういう時に諫めるはずのイヴアが気まずそうにしていた。ロゼは沈黙を守っている。

サプライズ、演出。  
つまり。

サボタージュ。

責任放棄。

無断欠席。

ざわざわと 特に、私の後ろから聞こえた。お父様とは、今日も引き続き口を聞いていない。目も合わせていない。あの人が、一体何を考えて私をここに連れてきたのか分からない。

「お嬢様、よろしいのですか？」

黙っていたロゼが、私に静かに尋ねる。

「……ええ」

私は短く答えた。

手遅れ。末期。獣医も黙って首を振る。

もう目立たないことが不可能ならば、精々、恥を晒してやろう。

この殻潰しを、<sup>まけいぬ</sup>駆り立てたことを精々、後悔させてやろう。

負け犬、遅すぎた反抗期。

騒ぎは、大きくなっていき。

突然、止んだ。

向こう岸に、一つのシルエット。それがゆっくりと影を大きくしていく。それから、台上に伸びた。

それが喋る。

『 お呼びにかかりました、新人生代表、アナスタシア・ホワイ  
トヘッドです』

銀髪に、張り付いた不敵な笑み。その視線は、絡み付くように私を捉えていた。

白い陶器の間から出る黒い蛇が、私に纏わりつく。

『この場で、このように挨拶が出来ることを、とても誇りに思います』

齒の浮くような言葉の羅列。銀髪を揺らしながら、仰々しく女は言った。

その言葉は、誰に対していったのだろうか。

そんなことは考えるのも煩わしい。

そして、その演目の最後。拍手も待たずに、彼女は一点に指を差した。

『フェオドル・シュラプネル』

呼んだ名は私の名前。二つ目の私の名前。今、二度目の終焉クライマックスを迎えつつある私の名前。

壇上の女は、指さした腕をそのまま、左腕の上腕を私に見せつけるように持ち上げ、宣言した。

『あなたの様に誇りを持たない人間には、この学院は相応しくない』

入学式で、退学勧告。

共に、恐らく入学式で初めてであろう、サプライズを終えて、アナスタシアは身を翻ひるがえして段を降りた。拍手をする勇気のある者は誰もいない。

………左腕上腕のマーク。小さくてよく見えなかったが、先程のことで覚えてはいる。

青い、澄んだ大空のような色の盾形の切り取り。その中を泳ぐように2対ついの白竜。

ホワイトヘッド家の紋章。

瞬からく間に勃発しようとしている、二大財閥の戦争。

辛くも、その最前線先発者に選ばれた私は、とりあえず一週間生き延びることを、目標にした。





(5) 謎が深まる負け犬の明日(前書き)

やっとこさ、一日が終わりました。

約2、5万字。ようやく学園がスタートするようです。

サブタイトルを数話、若干変更いたしました。

(5) 謎が深まる負け犬の明日

さて、約束通りの説教タイム。

お呼び出し。

フェオドール・シユラプネル。

アナスタシア・ホワイトヘッド。

先の首謀者、両名は学院長室にて面を突き合わせていた。

素敵要塞の一つ、その一階の一室。特筆して挙げられる点は、何も無いということが挙げられるだろう。

……何も無い。からつきし。小さい窓から入る、おやつ時過ぎの日当たりと、角張った大きな目の木製の机が中央にぼつりと置かれているだけ。

白すぎる壁が、床が、より一層空虚さを醸し出していて、まるで取調室のような いや実際に今から取り調べを受けるのだが。

ここに来るまでの廊下や、そこから見られた事務室らしき、教室らしきその他の内装が、殊の外華やかな装飾がしてあったのも、この部屋の尋常の無さをこれでもか、これでもか、と主張してきていた。

会場を後にして、オカマ風貌の教師に誘拐され『もうちつとしたら学院長来るから、それまでここで待っててねい』と、この牢獄に閉じ込められた私達は、先程の喧嘩(?)の続きをする気にもならず、囚人さながらの気分で机の前に直立し、ひたすら黙り込んでいた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

かれこれ、20分ぐらい恐らく経っていると思う。多分。

時間間隔すら惑わされていた。

何も無いという恐怖。人間は何も無い部屋に閉じ込めておくと発狂する、と何かが言っていたことを思い出していた頃。

「やあ、ごめんごめん。少し遅れてしまったかな？」

やけに軽い声で後方のドアから入ってきたのは黒髪の優男風。先程の式典でも、何やら言っていたような気がする、学院長だった。

何となく、私はほっとしていた。

「ちょっと色々とトラブルがあつてね。まあ、君達なら予想もついていると思うけども」

彼は言いながら部屋を進み、私達二人と机を挟んだ所に移動した。ちなみに椅子は無い。椅子と机、セットで然るべき用具のかたっぱしをわざわざ取り除く必要性は分らない。と。

「……先程は申し訳ありませんでした」

抜け駆けする白髪。横目で睨みつけてみるが、そうしたところで何の意味もないことも分かつていた。

#### 説教タイム。

実のところ、呼ばれた理由は当初とはすり替わっていた。

コンスタンティア魔道学院。世界最高峰を自称する生意気な学校。その実態は、金持ち共の醜い権力争いの場。その場で2大筆頭金持ち家の娘達のいざこざ。

特に狙ってやったわけではなかったのだが　　というか思いつきでやったのだが、物凄い飛び火が、あちこちにボヤを起こしてしまったようである。

負け犬のやけくそ、被害甚大。

どうも、やりすぎてしまって、

「すみませんでした」

かけらも思っていないことを、一応私も礼儀として言うておく。

学院長は　　実際その被害を一番被ってしまった第三者さんは、朗らかに笑った。

「いやいや、済んだことだからね。うん、もう済んだことだから、気にしないでいいよ、二人とも」

……朗らかに怒っていた。

なんだかイヴァと同じ匂い　不幸を真っ先に被<sup>レ</sup>ってそんな雰囲気である。

まあ、もう遣伝子レベルでそういう人はいるらしいので、猫に噛まれたと思って、人生楽しく諦めた方が吉であろう。

私みたいに。

「まあそういうことだから、それについてはこれで終わり。それで、フェオドル嬢」

「……はい？」

案外あっさり彼は話題を切り替えた。もつとぐちぐち言われるものだと思っていた私は、少しびっくりして頓狂な声で返事してしまう。

ふと先生の顔を見やると、何やら先程とは打って変わって真剣な顔をして。

……やたらと、真剣な眼差しで私を見つめてきていた。

じーっ、と集中しているかのように、整った顔がこちらを見据えていた。

なんだか、居心地が悪くなるような視線。

むずむずする。

見透かすような、見通すような。ずっと私の胸の辺りを穴が開くほど見つめていた。

……ん？

……見透かすような。

魔法……？

「あ　あの、そ、そういう反則技はいけないと思います、男として」

「………は？」

思わず胸を手で隠すしぐさをしながら、私の口について出た言葉に、先生は困惑で目を丸くしていた。

その顔が物語っていた。無実。

「い、いえ、なんでもないです……」

……ちよつと過剰反応しすぎたらしい。元男の、あまりにも女の子じみた胸の隠し方に、思わず顔が赤くなるのを自覚しながら、姿勢を戻した。

その横で、ぷつ、と何やら嘲笑するかのような笑い声。

「見るほども無いくせに」

ぼそつ　と、聞こえないとも思っていたのか。

私は、叫びそうになる気持ちを何とか抑え、思いつく限りの怒り顔で、白髪を見殺そうと試みていると、「ふむ……やはりそうだね」と、何やら先生が呟いていて。

「やはり、君はどうやら、特殊なようだね」

と、言った。

「……………ふえ？」

今度こそ、私は素つ頓狂な声を上げていた。横では白髪がきょとん、といった顔をしている。そして多分、私も似たような表情いや、もつと混乱顔していたに違いない。

「……え、えと。なんて、言ったんです？」

慌てて聞き直す。

聞こえていなかったわけではない。何を言われているのか、分かっていなかったのではない。

ただ理解ができず、意味が分からなかっただけ。

この人は、私の胸のあたりの、一体なにを見ていたのだろうか。

見れるのだろうか。そんなこと、私は聞いたことも無い。

先生は、毅然<sup>きぜん</sup>とした顔で再度言い直す。

「君は、どうやら普通の人達とは違うみたいだね。異質<sup>いしつ</sup>というべきか特異<sup>とくい</sup>というべきか。何とも表現し難いが、そうだね、君のお父さ

んが言うには「

「ちょ、ちょっと待ってください!」  
遮る。

理解が追い付かなくなつて、遮つた。

どういふことだ。

お父様が、言うには?

学院長に自分の娘が『魔法不能者』だとも言ひふらしていたのだというのか。

入学試験を金で弾き飛ばし、その上で、娘が魔法を使えないということを学校側に言うのか。

なにゆえ、それで今この場所に私は立っているのだろうか。

というか、そもそも魔法が使えないのに、すぐに退学とかさせられないのだろうか。

意味不明。

理解不能。

私のこれまでの様々な疑問の氷塊が、爆発していた。

「……まあ、君がお父さんを恨む気持ちも、分からなくもないが、別に悪気があつた訳じゃないんだ。そこだけは理解した方が良い」

そう言つて、学院長は机を離れ、私達の傍らを通り過ぎていった。その後ろ姿は、話はこれで終わったと言わんばかり。

こんな中途半端。こんな謎だけ深めて。

ボタンっ　と音がして、彼は部屋から姿を消した。

しばらくして。

「……………どういふこと?」

残された第三者が私に尋ねる。

こつちが聞きたいわよ、私は吐き捨てて、走り去るように牢屋から逃げ出した。

「ちょ、ちょっと、待ちなさいよ!」

ボタンっ!

最後に思いつきり、ドアを閉めてやった。

何の気晴らしにもならなかった。

コンスタンティア学院、新入生の初日のスケジュール。

入学式を終えた後は、学院の広大な敷地内の隅っこにある寮にて、  
またしても式をあげるようになっていた。

入寮式。つまり、ただ部屋割りと使用上の諸注意などなど、ただ  
それだけのことなのだが。

そしてそれは私が到着した頃には終わっていて、私は自分で寮母  
さんらしき人に、部屋の場所と、簡単な寮の法律を聞いて（その間、  
皆部屋で荷物の整理をしていたのか幸いにも注目はされなかった）、  
すぐさま新たな寢床へと足を伸ばした。

なんだか見慣れすぎた赤絨毯を進み、扉の前へご到着。部屋番号  
を確認して、あえて私が大っ嫌いなノック音を響かせてみた。

すると、「はい」と中から元気な声が聞こえてきて。

「……あれ？」

取りあえず中に入ってみることにした。

ノブを捻り、私が足を踏み入れた瞬間

「おおお！　ようやくご対面ですねフェオさま！　うわあ、近  
くで見ると可愛さ10倍！　わあ、すごい金髪サラサラ！　肌超き  
れいー！　なんですか、もう、これ一体どういう仕組みしてるんで  
すか！　あ、ちょっとほつぺたプにプにしますね？」

「……………」

変な人がいた。

今日一日、5年ぶりに外へ出て、懐かしい人に会って。

初対面で殺そうとしてきた誇り大好き白黒や、なんか怖気が



するようなオカマ風貌教師や、優男風の視姦学院長など、散々な人間達に会って。

……その中で、さらに群を抜いて変な子だった。

小柄。ふわりと軽そうな栗色の髪、そのうなじ辺りを折り返すように髪留め。人懐こそうなブラウンの瞳をぱちぱち瞬きしながら、小動物よろしく、私の周りをくるくる回りながら、ほっぺたをプにプにと突いていた。

「ぬわー、なんという弾力！ なんというもっちり感！ こんな細いの、なんでこんな柔らかいんですか！ ぬう、もしかして、お尻とかもつと凄かったですか？ あ、あの、出来ればいいんですけど、それだったらお胸の方も触らしてもらってもいいですか？」

「それはやめて」

きっぱり拒否し、もう突かれながら何度目かになる部屋番号の確認を終えて、あまり関わりたくないが、遂に聞いてみることにした。

「……あんた誰」

その突き放した声音の問いに、なぜか顔をぱあつ、と輝かせて、その女の子はどうしてか敬礼ポーズで自己紹介を始めた。

「あたし、イルマ・カルディコツって言います！ 今日から一緒に住むことになる夫です！ 呼ぶときは『イルマちゃん』、もしくは『あなた？』と愛を込めて言うていただけるとより嬉しいです！」  
いつの間にか入籍していた。しかも私が妻役。元男としてなんかもうアイデンティティが壊滅状態だった。

頭が痛くなってくる。

「……えと、ここになんか仏頂面した、黒髪ポニーのメイドさんとか来なかった？」

なんとか我慢しながら、一応の相部屋候補のはずだった人物が、ここに来ていないかを聞いてみた。

「メイドさん、ですか？」

ああ、あの一緒にいた、フェオさま

には到底ありませんが、すつごく綺麗な人ですよ。あの方なら、多分違う部屋だと思うですよ？」

首を傾げながら、本人が聞いていたならば、恐らく無表情で怒り狂うだろう返答をした。

私に負けているということと、綺麗な人と言われたことと、二重の意味で。

まあ、凄絶怪力鉄メイドのことはさておき。

お金にものを言わせて入学しておきながら、護衛として私に付けた口ゼを、わざわざ寮で外す必要性が計り知れない。

本当に、一体何を考えているんだろうか、あの人達。

……意外に何も考えてないような気がしてきた。ずっと今日一日、色々深刻に考えてたけど、『ごめんねえ、フェオちゃん。なんとなく、嫌がらせを試してみたかったのよお』とか、あの母親仮面ならありえそうな話である。

「……ってか、間違いなくそれは少なからず思ってるよね」

「はい？ フェオさま、どーかしたんですか？ メイドさんに何かあるんですか？」

「ん。いや、なんでもない」

独り言を呟いていたらしい。

……とにかく、なんだか今日はものすごく疲れたので、馬車からの荷物の整理とか、夕食とか、もうその他諸々、どーでもよくなってきたので、もういっか。

全部、明日の私に任せよう。

負け犬、今日はもうおやすみしたい気分。

「えっと。イルマちゃん？ 今日からよろしくね。セクハラしたら殴るから」

「はい！ 不束者ですが、よろしく願いいたします！」  
釘を刺した意味は、特になさそうな気がする。

ようやく、長い長い、一日が終わろうとしていた。



(6) 憂鬱な負け犬の愉快的仲間たち(前書き)

そういえば今日、バレンタインデーですね。

むかつくんで、ちょっとかわいいフェオたん置いておきます。

これ、ちょっと鬱陶しい感じがしたので、場  
面が完全に切り替わった時以外は削除いたしました。

## (6) 憂鬱な負け犬の愉快的仲間たち

その日の目覚めは、ノックの音ではなかった。

何かに呼ばれたような気がして、重たい瞼まぶたを押し上げていく。

まず目に入ったのは、黄色っぽい、優しさを感じさせるような色合いの天井。

その天井付近に漂うように何やら光源が浮かんでいた。

魔法。

一昨日までの私なら、そうだと気付いた瞬間で、私は反射的に叫んだり飛び上がったたり、はたまた狂ったようにのた打ち回ったりしたことだろう。

だがしかし。

なんかもう昨日色々あり過ぎたためか、私は至極落ち着いた心持ちでそれを眺めていた。

負け犬、すごい環境適応。

自画自賛 もとい、自虐はさておき。

ゆっくりと体を起こす。

屋敷のゴージャスベットには到底及ばないが、なかなか良いフカフカ度合だったためぐっすりと眠れることが出来た。ただ疲れていただけという説もあるが。

私の部屋と、そう変わらない広さの寮室。引窓は開けられていて、青い遮光カーテンがゆらゆらと揺れている。日はまだ出ていない。入口付近横、普通に入れる広さのバスルーム、個別トイレ完備。玄関には残念ながら鍵はついていない。

と、どこぞの世界のマンション広告にでも書いてそんなことを言ったが、本当のことなので仕方がないのである。

この世界の基本設定について。引用、初等学校の教師と私の、遠き日々の会話。

『今、私たちが普通に住んでいる家や建物ですが、あれは大昔の昔人がまだ魔法を使えなかった頃に色々考えて作ったんですよ。すごいですよ。人間、魔法なんかに頼らなくても精一杯生きてたんです』

『へえ、そうなんですか。それはそれは、毎日汗水垂らして、せつせと働いていたんでしょうね。心底同情します』

『……フェオドルさん。そうやって歴史を軽んじてはいけませんよ。歴史というのは人間の成長日記。後ろを振り返って、初めて見えてくる明日があるんです。例えば、かの有名な魔女、コンスタンティ  
』

いつだって楽しそうに歴史について語ってくる教師。

他の教師が、当時、無駄にませているように見えただろう私に魔法が全くこれっぽっちも使えない私に、気味が悪い、気持ちが悪いと言わんばかりの軽蔑の眼差しを向ける中。

……あの教師だけは、いい話し相手が捕まったとも思ったのか、永遠と日が暮れるまで私に講義し続けていた。

まあ、そういうことである。

過去の文化、様式を、そこにあったはずの何かをすっかり忘れて、魔法という裏ワザで代用しているのである。

全く。荒唐無稽、絵空事も甚だしい世界観である。

……ともかく。私は昨日サボっていた荷物の整理から始めようと、布団を弾き飛ばしベッドから降りようとして。

「う、うわっ!？ お、おまっ、なんて恰好で寝てんだよ!？」

「……………んー?」

どこかで聞いたような、男の声。

……男?

寝ぼけている頭をもう少し働かして、声のする方へ顔を向ける。すぐ横だった。

燃えるような赤髪と、顔に『不幸です』とでも書いてそうな、目つきの悪い面構えが、なにやら顔を赤くしてベットの傍らに立っていた。

「……イヴァ？ ……何してんの、こんなところで……」

目を擦りながらその顔に向かって話しかける。ただ単に魔法を見ても驚かなかったのは、眠かっただけなのかも知れなかった。

疲れは取れているのに眠い。なんだか、5年ぶりの体験。

そんなことをうつらうつら考えていると、イヴァが私に先程から何やら怒鳴ってるのが耳に入る。

「お、お前な、いくら5年間引きこもってたからって言っても、だらしなさすぎるぞ！ 昔は、異常なぐらい気にしてたくせに！」

「……だらしない……？」

「ふ、服だよ、服！ 目のやりどころに困るから、とつと何か着るよ！」

「……ふーん。……服？……」

言われて、自分の着衣を見下ろしてみた。

しわくちやの白いブラウス。黒いパンティは覆っている生地が少ない。昨日、母親仮面に無理やり着せられた下着である。いつもはこんなエロちつくなの穿かない。

はて。

昨日、私は部屋に入った途端、ベッドにダイブしておやすみしたはずなのだが。

つまり、ブレザー着用、セーター装備、スカートは当たり前。靴下もそのまま、靴さえも脱いだかどうかあやしいくらい。

どうして脱いでいるのか。寝ながら脱ぐなんて高等技術を習得した覚えはないのだが。

「だ、大体なあ！ 昨日、夕食にも顔を出さなかったらしいじゃないか！ ロゼから聞いたんだぞ！ 幼馴染として心配して来てみたら」

ロゼ。

凄絶怪力鉄メイドから聞いた。

夕食。寮。女子寮。

……女子、寮。

そういえば、こいつ男だった。そういえば私、今は女だった。  
なるほど、なるほど。疑問がぴったり繋がって。

……。

「な、な、な、なんであんながここにいるのよ!？」

ようやく、私は晒していた身体を布団に丸め込んだ。

見られた。なんか知らないけど色々見られた。こいつに見られた。……も、もしかして脱がされた!？」

羞恥で顔が赤くなるのが、さらにむかついた。怒鳴った。

「変態! 死ね! 男として終わってる! 夜這いなんて男として終わってるわよ! この生真面目むつつり野郎っ!」

「む、むつつり!？」

なぜか、イヴァが一番に反応したのはその部分だった。顔をさらに真っ赤に、激昂させて言い返してくる。

「ち、違、誰が、夜這いなんぞするか! 大体、お前なんか襲う気にもならん」

「な、なっ!？」 『なんか!?!?』 『なんか!』 って言っただわね今!

あんな男のくせに、この体の素晴らしさがわかんないの!？ ホント男として終わってる」

あまりにも、低次元な言い合いのため、以下省略

「で、真夜中に忍び込んだと? 乙女の部屋に? 大の男が?」



「お前が乙女かという疑問はさておき、同室の人には悪かったと思ってるよ……」

イヴアは言いながら、私のベットの対称位置の寢床で、寢息を立てている人物の方を見やっていた。

何やら幸せそうな顔で寝ている　イルマだったか？

彼女は熟睡しているらしく、起きてくる気配は無かった。

「まさか二人部屋だとはな。ロゼも違う部屋って言ってたし、一人部屋になってんのかなと思ってたんだが……」

彼曰く。

昨日、式場でオカマ教師に連れて行かれた私が、夕食時にも顔を出さずにいたため、心配したロゼが男子寮のイヴアに頼んで（寮則第8条、異性の寮へは足を踏み入れず。呼び出すときは寮母さんを挟む）、夜、私の部屋へ忍び込み（3階）、慰めるようにお願いしたらしい。

『私では、あのひねくれ面を見るとどうしても腹が立ってしまい、慰めるのは到底不可能なので、イヴア様をお願いします。肉体言語でも可』

……どうやらあのメイド、屋敷から出た途端に弱くなった私に、今の内に仕返ししてやろうとも思っているようだった。

「それにしたって、問題あるでしょうが……」

この男も、私の部屋へ忍び込むことに何の抵抗もないらしい。

色々問題が山積みだが、肉体言語を使用されなかったことだけは、とりあえず不幸中の幸いだと思うことにしよう……

「で、大丈夫なのか？」

なぜかきれいに畳んでベッドの下にあった、制服を着直した

朝、シャワーを浴びてからもう一度着直すが　私に、心配そうに言うイヴア。

「大丈夫。別に、なんにも言われなかったし。今日からの学校につ

いては知らないけどね」

備え付けの椅子に腰掛けて、出来るだけ明るく私は言った。嘘は付いていない。

彼はまだ心配そうにこちらの顔を窺っている。

「お前は魔法が使えない上に、あのホワイトヘッドが、学校からお前を追い出させようとするかも知れないんだぞ？」

「大丈夫大丈夫。どうせ、家の力を使うわけにもいかないから、ねちねち言うぐらいしかできないわよ。もし追い出されても、私は一向に構わないしね」

多分、娘の喧嘩にそこまではしないだろうし、出来ないだろう。

家ならこちらの方が勝つて<sup>まさ</sup>いるからである。

まあ、出来るのなら、むしろ追い出して欲しいものである。

頑張れ、白黒無色。シユラプネルなんかに負けるな、白黒無色。

負け犬、他力本願。

「……まあそれならいいんだが」

イヴアはまだ心配そうな顔をしていた。そんなに、私が深刻そうな顔でもしているんだろうか。眠たそうな顔はしているだろうけど……

しばらくして、彼は短くため息を吐くと、

「とにかく。何かあったら、すぐ言えよ。俺はお前の幼馴染なんだから」

と言って、私のベットから腰を上げた。

そのまま夜風が吹き込む窓に近づき、枠に足を引っ掛ける。

掛けたところで、私はまだ言っていなかった言葉を思い出した。

「イヴア。昨日は、助けてくれて、ありがとう……」

その言葉に、背中を向けたまま片手だけ挙げて、彼は夜の空へ飛び出して行く。

同時に、魔法の光がぷつ　　と掻き消えた。

一度中途半端に覚醒してしまったためか、かなり早く床についたためか。

まだ暗い内に、私は荷物の整理を始めていた。

照明は無いので、明け方のうつすらとした光の中での作業である。厄介なことに、基本的にこの世界の明かりは全て魔法なのである。そのため屋敷では、約一年半かかって作り上げたランプを使用していたのだが。　　結構、死に物狂いで作った覚えがある。

何個もある革製のバックから、色々と引っこ抜き出す。

可愛い私服。純白のパジャマ。メイドに作らせたスリッパ（この世界には無いのだ）。いつの間にか私の下着が無く、母親仮面チヨイスの下着が入っていたりする中に、まぎれて、一本の剣。「これ……」

鈍い光沢を放っている鞘から引き抜くと、鞘と全く同じ材質の刃。私の肘までも満たない刀身と、少し太めの柄。ただの小綺麗なシヨートソードもどきにしか見えないが、それでも立派な魔剣である。その証拠に、暗くてよく見えないが、ちっこいルビーが柄のどこかに埋め込まれているはずなのだ。

家のシンボルマークにもなっている赤の剣ルビー・ロッドと呼ばれるこの剣は、代々シュラプネル家が、この学院にお供として持っていくのがしきたりなんだそうだ。

「まあこんなもの、使う機会は全くないだろうけど」  
自嘲して、私は鞘に戻した。

そんなこんなで、荷物の整理を終えた時には、日もさんさんと顔を出し始めて。

朝食まで一時間半を切った頃。

「イルマちゃん。朝ですよー。とっとと起きろー、というか起きてー」

一向に起きる気配のない同居人の耳元で、私は必死に起こそうと呼び掛けていた。

そろそろ女の子として、シャワーを浴びて、色々な支度を終えるのにはギリギリの時間なのだが。

……バスルーム、日の光が入らない。魔法の光がないと怖くて使えない。

いや、別に『お化けが出そうで怖い』とか、そんな乙女じみた理由では断じてないのだけれども。

とにかく。そろそろ起きて貰わないと困るので、揺すってみるのも考えてみたりしたのだが。

……ふと自分が元男だったことを思い出し、寝ている女の子に触れるのはダメな気がしていた。

「うう……」

負け犬、根性なし。

「むにゃ……んむー……」

同居人は私に容赦なく、相変わらずの幸せそうな顔で眠りまくっていた。

こうして、近くで黙って見ていると、この子もかなりかわいかったりする。なんだか守ってあげたくなるような、愛玩動物みたいな感じ。

「……何を考えているんだ、私は」

とにかく埒があかないので、若干昨日の仕返しに、ほっぺたをプにプにしてみることにした。

「……ん？……ふもー……うふふふ……」

なんだか笑っていた。寝ていても、やっぱり変な子だった。まあ

笑うのは覚醒してきている証拠なのだろう。私がそのまま突っついていると。

「うひひひ……ええのんか？……ここがええのんか？……」

「……………」

ん？

つんつん。

「ぬふふ……口では言えても、体は正直よのう……むふふ……………」

「……………」

つんつんつん。

「あはは……そうかそうか、もう我慢できないのんか？……こんの黒パンツなんか穿いて、いかにも純情派ぶってる顔して、いやらしいよのう……………ふひひひ……………」

「……………」

へえ。

やっぱり、あんたか。

脱がしたの、あんただったのか。

「……………うふふ……………」

これは本格的に釘を刺さないと、これからの学校生活、授業はもちろんのこと、寮でも休まるどころが無いとなると、精神的死亡率確率が非常に上がってしまう。

寝ている女の子に暴力するなんて、悪い気もするが。

「うふふふふ……………」

負け犬、涙を吞んで、殺らして頂きます。

「ふへへ……………ん？……………い、痛い！……って、あ、あれ、フェオさまが2人？……って痛たたた！……めちゃくちゃ痛い！……ふえ、フェオさま、お仕置きなら、お尻ぺんぺんとか、縛ったりとかの方がいいですよー！……あ、だめ、無理！……その関節そっちには曲がらなふげっ！？」

何とか間に合って、初めての朝食

「いやー、今日からフェオさまの天下が始まっていくのですね！  
あたし、ドキドキワクワクしてきました！」

「いいから黙って食べないと、今度は背中方向で右肘を左肘にくっ  
付けるわよ」

……こんな感じのやり取りを先程からずっとしている。

この子はどうやら、昨日あの白黒無色（気に入った）と乱闘騒ぎ  
があったところを見ていたらしく、どうしてかそれで、私のことを  
神聖視しているらしいのだ。

……あの時の私は、みつともなく腰抜かしてたぐらいいしか見せ場  
が無かったと思うのだが。

一体、この子には何が見えたのだろうか。

口の周りにケチャップをつけながら、彼女は手でガッツポーズを  
作った。

「フェオさま、あの偉そうな銀髪ヤローなんかぶちのめしてやって  
ください！ 夫として、毎晩関節技の練習に付き合うのもやぶさか  
ではありませんです！」

反省して無かった。

「……随分と変なのに好かれたものですねお嬢様。さすが、類は友  
を呼ぶとはよく言ったものです」

いつもの冷たい声が、脳髓に染み込む。

「あんたら、いい加減にしなさいよ……」

右隣にイルマ。左隣にロゼ。

左右からの温度差攻撃に、私は心底疲れ果てていた。

食堂。総勢600名前後入れる寮はいくつかに棟が分かれており、  
それぞれの棟に食堂がある。

……馬鹿げた規模である。

その一つ、よりもよって中心を席を陣取って食事を取っているのだが。

もうお馴染みの注目度合だった。

私、ロゼはともかく、イルマまで注目に見舞われる必要はないのだが、一緒に食べると言って聞かなかった。

あまり、私にかかわるとロクなことにならないと思うのだが。それに。

この子は、私のことを『あのホワイトヘッドに啖呵を切れる、すごい人』として見ているのだ。

今日一日の初日能力検査が終わった後、一体どういうことになるか

想像には、難くない。

「はぁ……」

本当に、問題は山積みである。

## (7) 明らかになる負け犬の生態

コンスタンティア魔法学院。

この魔法社会について。

なぜ、シュラプネル家やホワイトヘッド家などの金持ち 権力者に、あそこまで注目が集まるのであるか

それは人間が、魔法という力を持って、その個々人の力の幅が極端に大きくなってしまったからである。

つまり、私というシュラプネル家の人間が周りにどう見られているのか。

化物。

悪魔。

脅威。

畏怖。

触らぬ神に、祟り無し。

……そしてここは、子息という兵器を使って、自らの家の軍事力を顕示し合う戦争地域。

一週間生き延びる。

案外、ちょうどいい目標だとは、思わないだろうか？

一定クラスごとに、素敵要塞 もとい、校舎は別々になっていた。

レベル別、つまり入学試験での成績で振り分けられているそうなの。つまり、私が今いるこの校舎がどこであるか。

「……そりゃあね。分かつてはいたけど」



もちろん、一番上だった。

シユラプネル家、権威を振りかざしまくっていた。

「……………金持ち死ね」

呟く。

「お前も、その金を使って引きこもってたんだろーが……………」

横から鋭く痛い突っ込みが飛んでくる。

今さっき合流したばかりの、同じく金を使ってここに来たらしい、イヴァだった。

「…………言つとくけど、俺はちゃんと試験受けてるからな。実力だ」

「あれ？ 私、なんか独り言でも言った？」

「顔に書いてる」

顔に出てたらしかった。

まあそれはさて置いて。

一番上級クラスの校舎。特別外見上に変わりはない。かくかくした煉瓦風材質の要塞である。ちなみに、「外からダイナマイト

（この世界には無い）で爆破しても、傷一つつかない素敵要塞」というのは、なんと本当のことだった。

レベル別に校舎が分かれていると言ったが、二階かそこら辺より他の校舎の方に橋が架けられており、同様に全ての校舎が繋がられていて、まるでコンスタンティアドーム（入学式場のアレ）を囲い込むかのような構造になっている。

全ての校舎つて、一体何棟あるのだろうか。

「ホント、馬鹿げた規模……………」

何度も思ったことを、再度口にする。

校舎に入ると、真<sup>がびよう</sup>つ先に掲示板が私達をお出迎かい。コルクみたいな材質の盤に画鋏で紙を貼り付けている。

そこにはクラス表が掲示されていた。というのも、寮でどの

校舎が教えられただけで、詳細なクラス分けを聞かなかったからである。勿体ぶる必要性は皆無だと思っただけだ。

それでも、普通は取り立てて怒るほどでもないだろう。ただ校舎に着くまで緊張感に苛まれるというだけだ。むしろ人によっては好まれるかもしれない。

だがしかし、私の場合は好むどころか、本当にいい迷惑なのである。ようするに

ばささっ！

……私達が辿り着いたと気付いた瞬間、掲示板の前でワー、キャー騒いでいた人々が、一斉に飛び退いた音である。

「……………」

「まあ、こうなるわな……………」

どうにも、イルマから聞いたところによると、私と白黒無色の仁義無き戦いの行方が、生徒達の話題の8割方を占めているらしい。

『大丈夫です！ 私、お嬢様の可愛い寝顔とか人柄とかエロ黒パンツとか、昨日の夕食時に広めまくったんで、信仰力なら絶賛リード中です！ 何も問題はありませんです！』

……イルマちゃん、私の首を絞めまくっていた。

というか、夕食前にもう脱がしてたのか。 実は、脱がされただけで終わってなかったりするんじゃないんだろうか。

不安だらけ。

前途多難。

…………… だけど。

だけど、あの子は私を全く怖がりも、避けたりもしなかった。

まあ、それも、昨日までのこと

「とにかく、ありがたくクラス表見して貰ったとくか……………」

「…………… うん」

肩を落としていた私に、ポンっと手を載せてから、彼は掲示板へ

と近づいて行つた。

私もそれに続く。

周囲は、教室に続く廊下に移動　するように見せかけて、ちらちらと振り返っていたり、中には物陰に隠れて、様子を窺っていたりする。

……バレバレだった。

だが気にしていても仕方無いので、私は気持ちを切り替えて、表をじっくり眺めていると

「げえ」

思いかけず下品な声を出してしまつたりする。隣を見やると、そこには私と全く同じであろう、表情をしているイヴアの苦り顔。

「なあ、これ……」

「ええ……」

彼の呟きに私は頷いた。思っていることは、一緒だった。

「そりゃあ、同じクラスになるわよね……」

がつくりとうなだれた私を、ギャラリーは未だ興味深そうに覗いていた。

「あら、フェオドル。今日も朝からボディーガードを引つ提げて、あなたは自分の身も守れないのかしら」

誰の言葉かは、言うまでもない。

いつぞやの式場の時と同じ面で、部屋の中心の机でふんぞり返っていた。

私は無視して、自分の席に腰を掛ける。ちなみに席順は、どういった理由なのかランダム方式で割り振られているのだが。

まさか席まで隣になるとは、一体これは何の陰謀なのか。

これはもしかすると、シユラプネル家、ホワイトヘッド家双方が、

私が考えうる限り最悪のシナリオで戦争をするつもりなのかもしれない。

つまり 娘達で競わせよう、的な。

いや、最前線先発者って自分で言っていたように、気付いてはいたのだが。

「あははは、イヴァ、どうしよう、私泣きそうなんだけどー」

「いてっ、ちょ、何で俺を殴るんだ！」

前の席になっていた、ボディーガード、もといイヴァの後頭部に八つ当たりをしてみた。

……軽くだったのに、拳が痛くてびっくりした。引きこもり負け犬、体の貧弱さは底知らず。

と、そんな私達の様子を見て、アナスタシアは呆れ顔で、  
「本当、仲がいいのね。いちやいちやと、見苦しいので止めて貰えないかしら」

「……ふえ？」

いちや、いちや……？

なんだか、理解できないことをのたまっていた。  
さすがにこれは無視できなかった私が、どんな罵詈雑言を擁<sup>よう</sup>して否定しようかと考えていると。

「ち、違う！ 誰がこんな自意識過剰で陰気を周りに押し付けていく迷惑女と、いちやいちやなんかするか！」

「……え」

先手を打って、否定したのはイヴァだった。

随分きっぱり、罵詈雑言を用いて否定してくれていた。

別に、何も問題は無い。

無いのだが。

「あ、その、違うんだ、フェオ、今のは言葉のあやだ！ そう  
いうことだから、俺が普段からお前の事をそういう風に思っている

とかじゃなくて」

なにやら、私に向かって必死に弁解している。

「あはは……」

よく分からないけど、慌ててかわいそうだったので、私は天使のような笑顔で彼を諫めることにした。

「なに焦ってるの？ 別に全然怒ってなんかないわよ。今日の朝も、散々、言われたし分かってるわよ？」

その横で、またいらないことを言う奴がいた。

「振られたわね」

……ぴしりっ。

なにやら、体の中から決定的な何かがひび割れた音がした。

本当に

本当にこの女とは、恒久的に相性が悪いようである。こうまで、私のカンに触れるとは、いやいや、なかなかの才能である。

私がついに我慢できなくなって、その女に怒鳴ろうとした刹那「はいはい。みんな座って座って。今から出席取るわねい」

……オカマ教師が出現した。

あんた、最上級クラスの担任だったのか。

多分、この教室が、最優等生 化物どもの集まりなのは間違いないだろう。

計25名ほど。だいぶ少数だった。

木製の表面がつるつるした机に、椅子。……どこかで見た覚えがある配置。

ちなみに、ロゼは一つ下のクラス、イルマは一番下の棟。イヴァが優秀すぎるのが腹立たしい。

……そして、本当の私は青空教室にでも入っていることだろう。  
負け犬にはお似合いである。

「じゃあ、今から能力検査を行うから、各自更衣室でトレーニングウェアに着替えて、第三グラウンドに向かつてねい」

ふと聞き流していたオカマ口調に耳を傾けると、そんな声が聞こえてきた。

………能力検査。

まけいぬ  
魔法不能者が暴かれる瞬間。

とうとう、ここまで来てしまったらしい。

「はあ………」

もう諦めているのだが、ため息が出ることぐらいは許してほしい。  
負け犬、本当に憂鬱な気分。

「……フェオ、大丈夫か？」

前から振り返って、イヴァが心配の声をかけてきたりするが。

「別に。私と話していると陰気がうつるらしいから、もう話さない方がいいんじゃないの？      ああ、こういうの自意識過剰って言うのかな」

ふっきらぼうに言い放つ私を、彼はジト目で見つめていた。

「……お前、案外根に持つタイプなのな」

「そうね。陰気らしいからね」

「いや、だから機嫌直せって」

「自意識過剰、陰気女は、一度言われたことを深く根に持って、来世まで持参していくのが趣味なのよ」

「……あっそ………」

黙らしてやった。

なんとなく、微妙な満足感に浸りながら、周りに合わせて席を立ちあがろうとしたところで。

ガタッ      ！

勢いよく教室の扉が開いて、続いて一人の教師が入ってつくる。

ん？ という生徒たちの視線の中、オカマ教師の方へと小走りで近寄り、なにやら耳打ちして、また小走りで教室から出て行った。まるで風のように通り過ぎて行った教師を見送りながら、なにか問題でも起きたのだろうか などと考えていると。

「えーと。ちよつち変更ー。今から女子は何も持たずに第一多目的男子は 適当に暇でもしといてー」

いきなり、予定が変更された。しかも男子、適当に暇しといて発言。

……この世界はどうやら男卑女尊だった。元男として複雑な気分。取りあえず、生徒として言われたからには従わざるを得ないので、余計な詮索などはせず、特に疑問も持たずに、私は指定された場所に向かうことにした。

「じゃあね、イヴア。精々陰気女らしく、後ろ向きに恥を晒してくるわよ」

「……ああ、行ってこい。もう何も言わん」

プイっ、と顔を背けて、いじけてしまった彼に手を振りながら、教室を後にした。

横でニヤニヤ笑っている、奴に気が付かずに。

私が、前世男だったことを思い出したのは、実は結構年が上がつてからなのである。

小さい頃から、薄々何かの記憶があったとは思っただが、完全に自覚したのは二桁ぐらいからだ。

……逆にそれがいけなかったのだろうか。

急に意識し始めてしまい、今ですら私は、自分の体をじっくりと見たことは無い。

お風呂に入るときは、タオルを身体にがっちり巻き、洗うときは

目を瞑る<sup>こぶ</sup>。

トイレをするときは、音が聞こえたら耳をふさぎ、拭くときは手の感覚オンリー。

着替えをするときは、目を瞑るのは当たり前、布擦れの音も聞きたくないぐらい。

一体、何をしてるのだろうと常々思うが、この素晴らしい身体を、薄汚い男の情欲に曝<sup>さら</sup>したくないのである。

無抵抗の女の子を、眺めるとか襲<sup>襲</sup>ったりとか、そういうのは男としない、というのが負け犬ポリシー。

……不可抗力は、どうしよう。

「ひええええ……」

一応言っておくが、これは私の声である。

第一多目的うんたらかい部屋の隅<sup>すみ</sup>っこで、おそらく顔をびつくりするほど真紅にして、恰好のせいであつてうずくまることもできず、必死に目を瞑<sup>こぶ</sup>って突<sup>つ</sup>つ立<sup>た</sup>っている私の悲鳴である。

上は下着を外して、直に來ているブラウス、下はスカート、靴下を脱いでいる。なんかマニアック。

クラスメイト達も、同じ格好をしていることだろう。床に脱いだ服がちらつと見えた。

ちなみに、前途のように誇り高き元男として、能力検査と言われたとき、私はトイレかそこらで着替えるつもりだった。一応。「はい、じゃあ次はヒルダさん、お願いします」

一体どういう順番なのか、一向に、私が布厚カーテンの内側に呼ばれる気配は無く。

身体測定。

魔法が社会の根底にある世界で、体格ほど無意味なものはないだろう。

ならなぜ？



決まっている。

こんな、私のピンポイントな弱点に触れることをできる奴なんて、決まっている。

「あら、フェオドル。そんな隅っこで精一杯ブラウス引っ張りながら、自分の貧相な身体でも隠しているつもり？」

誰の言葉かは、言う価値もない。

「……………なんで身体測定をやってるのかは置いて、どうして運動着でやらせないのよ……………」

下を向きながら呻くような私の問いに、そいつは恐らくニヤリと不敵に笑っていたのだろう。

「決まってるじゃない。あんな分厚いトレーニングウェアじゃ、体重やら股下やら、どうせまた脱がないと正確に測れないからよ」

この女

どうやら、まずはスタイルで勝負するつもりらしかった。

正直、まるで理解できなかった。著しく馬鹿馬鹿しい。もう痴呆が来ているのだろうか。驚きの白黒さ加減の肉体には、脳髓の代わりに何が詰まっているのだろうか。

「増えるワカメ……………いや、それは意外性に乏しいか。なら濃口醤油薄味とか……………」

「……………何を言っているの？」

現実逃避にすら突っ込んでくる。死んで欲しかった。

その時。

シャッ　とこれは、向こう側を隠していたカーテンが、勢いよく開いた音なのだが。

……………なぜ開けたのだろうか。

「じゃあ、最後にアナスタシアさんと、フェオドルさん、お願いします」

「……………はい？」

それはつまり。

公開、処刑？

……今、私に魔法が使えたのなら、ファイヤ・ボール灼熱玉の一つでも、所構わず  
ぶっ放したいところだ

## (8) 魔法不能者負け犬の醜態

結論から言わせて頂く。

負け犬VS白黒無色。

惨敗だった。

完膚なきまでに、完全無欠、これっぽっちの嘘偽りなく。

……………敗北。

あんな女の子達の前で、まともに見られない自らの裸を顕<sup>あら</sup>わにして、頭から爪の先まで隅々至るところを触診される屈辱を受け。

そして、得られたものは。

唯一の自信を、自慢を、存在価値を。

打ち砕かれた、負け犬完全体だけ。

「……………元気出せ、なんてもう言わんが、落ち込んでる暇はないと思うぞ」

先程まで、教室で暇をしていたイヴァが、まだいじけているのか遠回しに慰めてくる。

### 第三グラウンド。

私達の教室がある校舎の裏手、広大な黄土色の広場である。

あの後、更衣室でトレーニングウェアに着替えて 私は挫けずにトイレで着替えた 、当初のスケジュールを再開したのだ。

ちなみに能力検査とは、入学試験で一応の実力は測ったものの、授業初日で、再度その実力を確かめてやろう、という趣旨のものである。

これの結果によっては、その場でクラス編成まで変わることもあるらしく、他の人達は念入りに準備体操をしていたり、呪文を唱えたりしている。

……………準備体操？ 一体何すんの？

と、言われるかもしれないが、実はこの魔法と言うやつは、身体

能力を高めるものが基礎にあり、まずはそのテストというわけである。

横手には、まず初めの項目らしい、直線200メートルぐらいのコースが作られていた。

だが。

「別にもうどーだっていいわよ」

心底どうでも良さそうに聞こえるように、彼に私は言った。  
そう。

もうどうでもいいのだ。

たった一つの、お豆さんほどのプライドさえ踏み潰された私には、やる気など潰れカスほども残ってはいない。

負け犬、かなり堪<sup>こた</sup>えていた。

「はあー……」

そんな私を見かねてか、イヴァは長いため息ひとつ残して、私の隣から別の所へと離れていった。

そんなこんなで、200メートル走の始まり始まり。

スタート地点とゴール地点に一人ずつ教師がついて、男女関係なく生徒が二人、コースに並んで、なぜか魔法で鳴らしたピストル音でスタートしていく。

……そんなところまで魔法で真似をするのか。火薬などを作る気はまるでないらしかった。

とにかく、スタートして　すぐゴール。

これの繰り返し。何の見応えも無い。速すぎて、なんだか呆れすらしてくる。

初等学校の時、まだなんとか誤魔化しが効くほどだったのだが、さすがに満16歳　この学院の化け物達ともなると、当たり前だが次元が違っらしい。

そして、着々と時間が流れていき。

「じゃあ最後に」

……もう分かっているの、わざわざ最後とか言わないで欲しかった。

私は未だスタート地点付近に残っている、もう一名の方を見やる。

「はんつ。お手並み拝見、つてところかしら？ フェオドル」

長い白髪を手で払い除けながら（くくればいいのに）、いつもの不敵な笑みは絶好調で、私をねちねちねっと見つめていた。

私はもう、何を言う気力すら残ってなかったので、無視してスタート地点に着いて。

「まあ、なんとか全力で走ってみるよ。案外何とかなるかもしれないぞ」

……その私の横に、もう一人いた。

なるほど、男女25人だから、2では割り切れなかったのか。どうりで3レーン作っていたわけだ。別に先に一人走らせてもよかったんではないのか、という疑問はNGである。

「何とかってなによ。私みたいな人外にどうしろっていうのよ」

藍色のトレーニングウェアに映える、燃えるような赤髪に向かつて私は不満をぶちまけた。

すると、彼は困ったような、苦笑したような顔をしていた。

「そうやってなんでも後ろ向きに考えるなよ。頑張っている姿を見せれば、他の奴だって偏見とかしたりしないって」

なにやら、見当外れな甘々ちゃん丸出しなことを、言い励ましてきたところで、「ほら、スタートするから」と教師に急かされ、もう一人も含めて準備が完了する。

クラウチングは無し。それは真似していないようだった。つくづくよく分からない風習である。

そして。

スタート。

パンっ！

ピストル音が、だだっ広い大空に鳴り響いた。  
三者三様、揃い踏み、力いっぱい大地を蹴り飛ばし、足底の下には土吹雪が舞う。

そのまま、大きく前方へ一歩踏み出し、いざゴールへ  
グキっ！

……………実際には、そういう音はしないものだろう。だが、  
痛みとか力のすっぱ抜け具合的には、表現は決して間違いではない。  
続けて。

べしゃっ！

と、これは私が、地面と意思つきりキスをした音なのだが、ファ  
ーストキスがこんな、リングがゾウに踏み潰されたような音で終わ  
ってしまうとは、いやはや、情けない情けない。

などと、脳内逃避した後

「い、いにやああいいいっ！？」

例のごとく、転げ回った。

痛かった。

死ぬほど痛かった。

歯が折れたかもしれない。

顎が外れたかもしれない。

鼻が潰れたかもしれない。

「ふううえええええ！？」

奇声を上げながら転がった。砂が撒き上げられ、砂塵が舞い、目  
についた土が涙で固まった。

「ふえ、フェオドルさん！？」

教師が慌てて、駆け寄ってくる足音が聞こえるが、私の痛みに対  
する防御適応はしばらく終わりそうも無かった。

続いて。

屋内である。名称は訓練所、実際はドーム型の体育館のような建物だ。

先程の後　ちなみになんと、イヴァが全生徒基礎一位に輝いていた　、屋外の測定はまだまだ色々あったのだが。

……正直、ここまで酷いとは思っていなかった。

自慢だが、引きこもる以前は周囲に合わせようと、かなり運動神経も良かったはずなのだが。

いや、なまじ良かった記憶があるためか、さらに惨たることになっていた。

結果だけを、ここに言っておこう

200メートル走、リタイアしかけの4分13秒。

10キロ持久走。1キロでリタイア　　というか長すぎるだろう。せめて2キロにして欲しかった。

その他にも、よく分からない腹筋のような、腕立てもどき、握力測定らしき　は全て学校最下位。私達のクラスは一番最後だったため（なぜかは言うまでもない）、他のクラスの結果が全て出切っていたのだ。

本当に散々だった。

あまりの悲惨さにクラスメイトの視線が点になっていた。比喻ではない。

……せめて、もう少し運動しておくべきだったのだ。そうしておけば、あの女にウエストまで負けることはなかっただろう。　別  
に負け惜しみなどではない。

なにはともあれ。

もつとはつきりと、負け犬が拝める舞台の、ご登場である。

「では、最後にフェオドルさんと、アナスタシアさん、お願いします」

何度も聞いたくんだり。

…… 本当に、気が進まない。

指定されたラインに、私はおぼつかない足で、ふらふらと近寄っていく。今日一日で、引きこもりの体はくたくたに疲れ切っていた。ようやく線に到着し、覚悟を決めるように一度嘆息してから、ゆっくりと顔を上げる。

少し離れて、人型の物体　素敵要塞外壁と同じ材質らしい。それが目標になっている。わざわざ人型にしているところなどが、いやらしい。

「そろそろ、本気を出したらどうなの？」

と、このいらつきを滲<sup>にじ</sup>ませている声は、隣のアナスタシアのものである。

全てにおいて、同時にテスト出来るようにしている辺り、さすがだった。

「いい加減、あなたの演技には飽き飽きしてきたんだけど」

この女はおめでたいことに、私が手加減している、とでも勘違いしているらしかった。本当にそうだとすれば、私が随分と身を張った芝居を売っている、とでもいうのだろうか。

顔を強打し、足をつつて絶叫を上げ、明日には最下位クラスに飛ばされるのを、親に恥をかかせて止めてもらうのが？

……… 最後のはいいかもしれない。

そうだ。精一杯、恥をかかせてやればいいではないか。

あの人達が何を考えているのか知らないが、この負け犬をここに放なったことを、精々後悔させてやる時が来たのだ。

「……… そうね。そろそろ本気を出そうかな」

わたしは、睨みつけてくる彼女に、ニヤリと笑い返してやった。

アナスタシアはふんっ、怒気をちらしながら顔を逸らして、目標に向かって片手を掲げ。

宣言した。



「本気でやるわよ」  
途端、彼女の口が、まるで急加速したかのように、言葉を紡ぎだす。

呪文

ワード  
その言語が、自らの魂で、アニメ体外の生命を操作し。

生成し。

拘束し。

具現化する。

決めゼリフ  
最後に、魔法名を叫べば、完成だ。

……立派な、化け物の、出来上がり。

「ゼル・ブレイズ  
氷零炎爆槍！」

彼女の手のひら付近に、ごくごく小さな、白い冷氣のような霧が現れて

一気に爆発的な速度で膨れ上がり、前方に向かって、まるで槍のように、空間を貫く。

そして目標に収束した瞬間。

大爆発の衝撃波を辺りにぶちまけた

！

「きゃああああつ！？」

……私は情けなく悲鳴を上げながら、身を必死にかがめていた。その間も魔法の効果が撒き散らされる。

空気が歪み。

空間が軋み。

振動が飛んで

徐々におさまっていき……止んだ。

「……終わった、……の？」

恐る恐る、私は頭を上げながら、術者に尋ねるように声を上げた。そこには、満足げに笑う、いつものアナスタシアの姿。それから。

「す、す……い……」

教師が驚嘆の声を上げている。

それもそのはず

私が目標の方を見やると、そこには、何もなかった。  
あるべきものがなかった。

これまでの全ての魔法を受け止めてきた人型が、跡形もなく消し  
飛んでいたのだ。

つまり ダイナマイトよりは、上だったというわけだ。

「まあ、ざっとこんなところかしら」

彼女は教師が驚いたのを見て、偉そうにふんぞり返っている。

…………… 無性に腹が立った。小さくぼやく。

「魔法制御のテストなのに」

「……………聞こえてるわよ。ほら、さっさとあなたもやりなさい、フェ  
オドル」

ぼそつとした呟きにも、目ざとく突っ込んでくる。本当に腹立た  
しい奴だった。

「はいはい、やるわよ、やってやるわよ。やればいいんでしょうが」  
内心のむかつきを抑え込みながら、立ち上がる。

…………… 立ち上がった私を、なにやら周りがワクワクした目で見つめ  
てきたりしていたが、おそらく、5分後あたりには、シーンとした  
目をしているであろう。

ただ一人、イヴァだけは気遣わしげな表情をしていた。

昔から、いつだって彼は、私をそんな風に見守っていた気が  
する。

全く。出来損ないの幼馴染がいると、彼にとっては迷惑に違いな  
いだろう。

後で、一応謝っておこう

…………… 私は、彼らから視線を外し、もう一体の人型を見据える。

それから、身体の前に、掌底を突き出すように構えた。

大声を出すコツは。

喉よりもお腹で出す感じ。

大きく息を吸い込んで。

そして、私は、叫んだ。

「ファイヤ・ボール  
灼熱玉！」

間髪入れず　もう一度、叫んだ。

「ラケット・ボール  
白電撃！」

叫びまくった。

「エル・スタック　ルーク・フレア  
火灼霊！　赤焰核魔砲！　マクドナ・ルド  
肉小麦！」

さらにもう一度

「ちよつと待ちなさいよおおつ！？」

叫ぼうとしたところで、横槍が入る。

私は、半ばうんざりした顔で何事が聞いた。

「何よ」

「『何よ』、じゃないでしょうがっ！？　呪文はどうしたの！？

最後のは何なのよ！？」

「呪文は覚えてないわよ。ってかあんた、最後に突っ込むとは、なかなかやるわね。見直したわ」

「『見直したわ』、じゃないわよおおつ！？」

なかなかキレのあるツツコミだった。『何よ』とかしつかり私の声真似までしていた。

この女、意外に気が合うのかもしれない。新たなる可能性。

などと思っていると。

「呪文を覚えて……ない？」

「え？　どういうこと、なの？」

ざわざわと

ギャラリィが、私を困惑の眼差しで見つめていた。

教師が、私を驚愕の面差しで眺めていた。

……それはそうだろう。後者の魔法はともかく、ファイヤ・ボール灼熱玉の呪文を覚えていない人間など、この世にはほぼ存在しない。初等で、人生で、一番初めに習うであろう対魔物攻撃魔法。それほどポピュラーな魔法なのだ。

それを知らない人間なんて

「本当に、いい加減にしなさいよ、フェオドル！ 馬鹿にしてるの！？」

彼女はついに激昂して、私の胸ぐらを掴み拳げてくる。

背の高い彼女に若干持ち上げられながら、私は、心底気だるそうに、告げる。

「馬鹿になんかしてないわよ。だって私は  
それを知らない人間なんて

人間じゃない。

「だって、私は、魔法不能者だから」

人間になりきれなかった、一匹の負け犬。

全て終わって、寮。

私を待っていたのは、数々の視線。それはいつも通りなのだが  
なにやら、違った。

何が違うのかを説明することは難しい。

だが、おそらくこのカンは外れてはいないだろう。

とにかく、彼らの脇をすり抜けて、私は自分の部屋へと戻っていた。  
った。

すぐに、到着した。

3階。

こんなに近かっただろうか。

人は、楽しい時間ほど早く感じ、辛い時間ほど遅く感じるものだ

と、誰かが言っていたことを思い出す。

楽しい？

分らない。

だが、今は辛い時だということ分かり切っていた。

どんなに付き合いが短かろうと、拒絶されることは……辛い。

ほんの数回口を交わした程度。

あの、憎きアナスタシアよりも、話した回数は少ないかもしれない。

「関節は決めただけだね……」

独り言を言いながら苦笑する。思い出し笑いは良くないと思うのだが。

……とにかくにも。

扉の前で、ずっとこうしていても仕方がないので、初日と同じように、私が大っ嫌いなノックをしようとして

「フェオさまー？」

「え……」

すぐ傍にいた。

栗色のふわふわの髪の毛を揺らしながら、まん丸い目を、さらに丸くして下から覗き込んでいた。

「イ イルマ、ちゃん？」

私は、思わず彼女から数歩後ずさっていた。

……情けない、負け犬。

こんな風に、怯えるくらいだったら、初めから「魔法不能者です」とでも言っておけばよかったのだ。

本当に、情けない。

だから、私は彼女に、もう手遅れだろうが、せめてものケジメとして直接伝えようと、爪の垢ほどしかない勇気を振り絞って言うとした。

「イルマちゃん、私」

「フェオさまー、何やらニヤニヤして、いいことでもあったんですか？ あ、もしかして初日でだれか一目惚れでもしたんですか？

ってダメですよ！ あたしという夫が居ながら浮気は」

「私、魔法不能者なんだけど………って、え？」

勇気を振り絞った私を。

………粉々に打ち砕いてくれる弾丸トーク。

「いやまあ、たまにはいいかもしれませんが、何というか、一回1分までしかダメっていうか何というか、って一回でもダメじゃないですか！ あれ？………んー。と、とにかく浮気はダメなんです！  
ダメ！ のつと不倫！」

「………」

体全体でバツテンマークを表現していた。

………それに打ち砕かれた私は、黙って扉を開き、部屋の中へと足を進めた。ついでに扉まで閉めたりした。明かりがつけられなかった。

夕食後に、話そう。

引きこもり思考全開の後回しだった。

(9) 開き直った負け犬の覚悟(前書き)

タイトルの都合上、今回は短い上に、完全に前回の補足みたいになっ  
てます。

レイアウトを変更いたしました。

## (9) 開き直った負け犬の覚悟

結局、あの後すぐに話して。

「あ、それならあたし聞きましたよー。噂には早い友人がいるものでして」

「…………へ？」

再度私を打ち砕いてくれた。

お互いベッドに腰掛けて、私は真剣な面持ちで、彼女は気楽な表情で。

「え、えと。私が魔法不能者、ってこと、だよな？」

「そうですよー、フエオさま。ってか魔法ふのーしゃ？　ってなんですか？」

「……………」

どうやら、意味が分かってなかったらしい。

「だから、魔法不能者ってのは、魔法が一切これっぽっちも使えないってことなんだけど……………」

まんまな説明をする。

「それは分かるんですけど、そんなことってあるんですか？」

「え？」

「魔法が使えなかったらですね　火が起こせない！　明かりが点けられない！　魔物が倒せない！　力が湧かない！　ってかそもそも魂アニマがなーい！　生きられないよう！　……………みたいなふうになるんじゃないですか？」

大仰な身振り手振りで、順々にポーズなどを取ってイルマ。テンションから表情までころころ変わっていて、なかなかの演技派だった。

「まあ、そうかもしれないけど」

言われて、私は曖昧に頷く。



確かに、イルマの言っていることは間違っていない。

実際に、あの初等学校の教師にも言われたし、ロゼやメイド達、ベリル 妹にも、言われたことがあることだった。

火が起こせない、明かりが点けられない、傷が治せない、魔物が倒せない。

依然に。

魂がない。生命がない。この世界で、生きれるわけがない。だけど。

「……実物がいるから、あることなんじゃないの」としか言いようがなかった。

彼女は、んー、と可愛らしく首を傾げて「そーいうもんですかねえ」と、まだ納得はできないようだった。当然かもしれないが。

「……………ん？」

「と、というかイルマちゃん。私のこと、その、なんとも思っていないの？」

「ふむ？ なんとも って、大好きです！ フェオさま！ 夫ですから！」

「いや、そういうことじゃなくて」

この子は。

この子は、ホワイトヘッドに喧嘩を売れるほどの、シユラプネル家の魔道士である私に幻想を抱いていたのではなかったのか。

ならば、仮に魔法不能者じゃなかつたと、今日散々な醜態を見せつけた私に、幻滅してはいないはずがないのだ。

「…………そうじゃなくて。イルマちゃん。私のこと、軽蔑したり、騙された、とか思わないの？」

「はい？ けーべつ？ 騙、された？」

騙したのだ。

例えその気がなかったとしても、私は、彼女を騙した

「……ふえ？」

その時いきなり、強い怒気の声が張り上げられた。無意識に下がっていた顔を上げると、そこには、初めて見るイルマの表情があった。

真剣に、怒っていた。

「あたしは、そんなことでフェオさまを嫌いになんかなりませんですよ！」

そんなこと。

そんな、こと？

「あたしが好きなのは、ロゼさんや、あの赤髪の人と、楽しそうに笑い合っているフェオさまです！ 怪物だの、目立ちたがりだの、偉そうだの、周りからどう言われても、どう見られていても、へーぜんと、いつだって凜々しいフェオさまです！」

……やっぱり、私周りにそういう風に見られてたのか。

というか、私イヴァ達とそんな楽しそうに話してたっけ。

など、他にも色々つつこみたい部分があったが、そんな暇なくイルマの声は、さらにヒートアップしていく。

「それなのに、こんなことを気にしてどーするんですか！ そんなまるで繊細な薄幸の少女みたいなの、フェオさまじゃありません！ もっと図太く、こう、周りを見下したような目で、唯我独尊、我が道突き進む的ないつものフェオさまに戻ってください！」

「……………」

全て言い終えたのか

彼女は肩で息をしながら、私の顔を窺っていた。

いつの間にか、話しながらベッドから移動していて、すぐ私の目の前までいたりする。

そして。

私が動く。

「……フェオさま？ いきなり立ち上がったどうし い、いたた

たっ！ な、なんですか！？ 感動シーンのな、そういうの  
んですか！？ あ、もしかして照れ隠しですかー？ それなら夫  
として、やぶさかでは って、ちょ、無理！ それ以上いけな  
いっ！

すぐ後のこと。

バンッ と勢いよく戸が開いた。

「お嬢様！ おじょー ……………」

同時に、メイド服が勢いよく部屋に滑り込んできて、すぐ黙り込  
む。

来客に、私は至極普通の対応として、要件を聞いてみた。

「なによロゼ。そんな慌てて。何かあったの？」

そこにはロゼが、何やら顔にびっしり汗をかいて、直立していた。

「…………… お嬢様。あなたが一体どういう性癖をしてようが、そ  
んなことはどうでもいいのですが、一応何をしているのかだけはお聞  
かせ願えませんか」

「んー？」

大方私が心配になって、走って部屋まで飛んできたというところ  
だろう。

まったく、いつもは無愛想で鉄仮面なのに、いざというときは本  
当にかわいいメイドさんである。

私はそんなことを考えながら、なぜか荷物に入っていた縄で、  
イルマちゃんを縛り上げる手をせっせと働かしていた。

「ちよつとね。関節を決めたついでに、昨日の晩、一体私に何をし  
たのか拷問しようかと。あ、お母様と一緒ににはしないでよ。あの  
人は趣味だけど、私は仕方なくなんだから」

そう。仕方なくなので、何も問題は無い。

気絶している女の子に、暴力はNGという負け犬ポリシーは、身の安全には敵わないのである。

……言っておくが、私が昨日やられた縛り方ではない。普通にぐるぐる巻きにしているだけである。一応。

「……何も、口出しする気はありませんが……」

その様子に、若干呆れを感じさせながら言うロゼ。  
と、そこで。

「で？ 慌ててどうしたの？」

わざわざ分かりきったことを、私は聞いた。にやけながら。

彼女はその表情の意味が分かったのか、即座に懷から出したハンカチで顔を拭う。

そして何事も無かったように取り繕ってから、理由を述べた。頬はまだ紅潮していたが。

「お嬢様。宜しかったのですか？ あんなはつきり『魔法不能者』などと言いふらして。もう、誤魔化しは効きませんよ」

やや私を睨みつけながら言う。どうやら、噂とやらはほとんどのクラスに広がっているらしい。

だが。

それはもう、私の中では解決していた。

「いいのよ、もう。実際隠そうが、隠すまいが、私に魔法が使えるわけじゃないしね」

半ば自嘲気味に言う。

「ですが、仮にも、シユラプネルの人間が魔法が使えないとなると恥を晒すだけでなく、下手をすれば命の危険にまで及ぶ可能性があります。それでもいいのですか」

ロゼは語気を抑えて、静かに私に警告した。

命の危険。

当然、なぜこんな家が<sup>うち</sup>大きくなったかを調べれば、それに虫のように踏みつぶされた人達などが、腐るほどいることが分かるであろ

う。

それでもなく、偉ぶって気に食わないなどと思う輩など、それこそ掃いて捨てるほどいる。

そして私は、ちよつとしたちよつかいで、死ぬ。

殺そうなどと大層なことを考える必要はない。魔法訓練時に「手が滑ったー」とでも言いながら、ファイヤ・ボール灼熱玉でもぶつけてやればいい。びっくりするぐらい、あつさり死ぬ。

開き直っても、私は負け犬なのだ。

……そして、それが私だ。

負け犬。

ひねくれ者で、我が儘で、引きこもりで、自意識過剰で、実は目立ちたがりで、偉そうで、後ろ向きで、臆病で、傍若無人で、怖がりで、他人に陰気押し付ける迷惑女。

だから、私は。

「私の専属守護隊長さんに、期待してるわよ」

意識したのは、あの女の不敵な笑み。

彼女は心底呆れ果てた、とでも言った風に、ため息をついた。

(10) 一人相撲負け犬の隠された力

「はい。イルマちゃん、あーん」

「ふえ、フェオさまー、あたし、ピーマンは嫌いなんですようー」

「イルマちゃん、ダメだよ。好き嫌いしていると、大きくなれないわよ?」

「大きくななくていいです。フェオさまぐらいの大きさがちょうどいいんです」

「あははは、イルマちゃん。それどういう意味? 場合によっては、このままトマトスープに顔を突っ込んでもいいんだけど」

「ご、ごめんなさいです! 悪い意味で言っただんじやないんですよう! だ、だから、スープの距離縮めるのやめてくださいですう!」

と、まあ何をしているのかと言うと。

夕食。またしても食堂のど真ん中で。

ミノムシよろしく、ぐるぐる巻きにされているイルマちゃんに、事前に見当をつけた野菜料理を食べさせてあげているのだ。

「うふふ……」

……すぐ、楽しいです。

思わず顔がほころんだ。

「ほら、さつさと食べないと、いつまでたっても終わらないわよ?

私、一度やるって言ったことは、必ずやりきる主義だから。

楽しいことは

「ええっ!? む、無理です! 鬼畜です! こんな青赤黄色の物体なんて、人間に食べられるものじゃないですよー!」

例のごとく注目はされている。

しかし、そんなことを気にする必要はもう無い 初めから気にしていないという説もあるが ので、普段の私通行に行動することにしたのだ。

そう、これが屋敷にいた頃の普段の私。基本的に気分と思いつきで行動している。

ロゼが魔法にビビりまくる私のことを、意外だと言ったのもこれが原因なのかもしれない。

……ロゼ？

気が付いて、左右を見渡す。すぐに見つかった。

「……………ロゼ。何してるの」

「いえ。お嬢様の嗜好のことは本当にどうでもいいのですが、余りにも見苦しいので、離れてみました。5メートル程」

……ドン引きしていた。

凄絶怪力鉄メイド、職務放棄。

さすがに上役として、私は注意する。

「いや、あんた私の専属守護隊長でしょうが。ついうっかり氷零炎<sup>ゼル・ブレイズ</sup>爆槍でも飛んできたらどうするのよ」

「大丈夫です。今のお嬢様は、テコでも死なないと思います。心配して損しました」

なんだかむくれていた。

本当に、心配してくれていたらしい。

どう言つべきなのか　とにかく意外である。

私のことを心底嫌ってはいるが、メイドとして仕方なくついて来てくれているだけのはずなのだが。

というか、そういえばメイドって別に身体警護の職じゃないと思うんだけど

というツツコミはNGなのだろうか。

と。

「あー」

注目の輪から、一步踏み出して話しかけてきたのは、見知らぬ女生徒。

そつえば、これだけ視線に遭いながら、話しかけられたのは初

めてのことである。

「は、はい？」

緊張して、ちよつとどもり気味になってしまう。

その生徒はかなり長身で、男前でカッコイイという表現がぴったりの風貌をしていた。

後頭部を片手でポリポリ掻きながら、もう片方の手を差し出してくる。

「これなんだけどね……」

その手には、何やら手のひらサイズの小さな一枚の紙切れが掴まれていた。見る、ということらしい。

私は「ど、どうも」と、なにやら情けない感謝の声をかけながら、その紙切れを見て

「……………」

絶句した。

何も

何も言えなかった。

これは一体何なのだろう。私の理解の範疇を二回りも超えている代物だった。

と、そこで。

「あ、これ知ってます！　というか、私の友人さんが作ったものなんですよ！　すごいですよね！。この、写真？　って言うらしいんですけど、独自に魔法を作ったってこの前楽しそうに話してたので、フェオさまの布教活動のため、手伝ってもらったのです！」

なんだか自慢げに、縛っていなかったら胸を張るポーズでもとっていきそうなイルマの声がした。

それがいけなかった。

私の攻撃の矛先は、彼女に向けられることが決定された。

「な、な、なによこれはっ！　どういことー！」

「むっ！？　ふえ、フェオさま、赤いのが、赤いのが眼前に迫って



おります！ このままではこの危険色の毒薬に着水してしまいまわぐうっ！？」

イルマちゃん、トマトスープに顔を突っ込んでジタバタしていた。いや、私が頭を押さえつけているからなのだが。

その写真もどき。

……………身体測定の際、隅でブラウスを一生懸命引っ張りながら、ぎゅっと目を瞑って直立している私の姿。カラー。アングル床から上向きにより、母親仮面チョイスパンツまる見え。

「な・に・が布教活動よ！ ただの盗撮じゃないのよ！ どうやって撮ったのよ！ なんでパンツ見えてるのよ！ なんで色つきなのよっ！？」

「フェオさま！ まずいです！ これちょーまずいです！ リバー スしそうです！」

イルマが皿に顔を突っ込みながら、真っ青な顔で叫んでいた。

「お嬢様。落ち着いて下さい。大丈夫ですよ、とても良い絵じゃないですか。こ、こんな愛くるしい顔出来たんですね」

「……………どうして半笑いななのよ」

いつの間にか近寄ってきていた口ゼは、口元を手で隠しながら、目が完全に笑っていた。

その時。

「あっははははは！ いやー、いい反応するねえ。やっぱ、あんた面白いなあ」

……………男前さんが大爆笑していた。

笑ってても様になるところに、なんだか怒る気も失せてくる。

「え、えーと。これは、なんなの、かな？」

気を取り直し、イルマちゃんの頭を押さえつけていた手をささと引っ詰め、出来るだけ笑顔で尋ねてみた。

……………今さらキャラ作っても、もうどうにもならない気もするが………笑顔の私の問いに、男前さんは、顔をびくびくと引きつらせなが

ら答えてくれた。

「いやあ、なんかこれが生徒の間で出回ってたんで、本人に知らせたらどうなるのかなーと。ただそれだけなんだけどね。ぷくくっ……」

「さ、さいですか……」

まだ笑いを堪えていた。

正直、いい加減にして欲しかった。

………って、あれ？

「あのー。もしかして、ヒルダさん？」

「ん？ あー、覚えててくれた？ これは光栄だねえ」

男前さんは、クラスメイトのヒルダさんだった。

ただ単に、クラスメイトの名前で、覚えていた名を言ってみただけだったのだが、どうやら当たってくれたらしい。

「……御知り合いなのですか？ お嬢様の？」

「うん、クラスメイト。……なに、その在り得ない現象を目の当たりにしたような反応は」

隣でロゼが驚愕の面持ちを浮かべていた。

私も、だけど。

クラスメイト。

化け物クラス。私の魔法不能者っぷりを一番目に焼き付けた人達。あの最後のテスト、魔法制御の後、みんな呆然と私の方を見ていたと記憶している。

アナスタシアはその場で石化していた。それだけは気味がよかった。

まあそれはともかく。

どうして私に、こんな普通に話しかけられるのだらう。

という疑問が表情に出ていたのか、ヒルダさんはまた笑い出しながら、話した。

「今年はそのシユラプネルとホワイトヘッドが、同世代で一緒に入ってくるっていうからさ。一体どんな怪物なのかと思ったら、こん

なキュートなはっちゃけお嬢様だとは、びっくりしちゃったよ」

「……きゅ、きゅーと？ はっちゃけ？……」

その理解不能な言葉は、なんだか頭が受付を拒否しているようだった。

「身体測定のこれといい、最初のテストですっこけて転がるわ、持久走では1キロで足つつて悲鳴あげるわ、極めつけの最後には、じゅ、呪文を覚えてないって。ぷっ、くくくっ」

「……………え」

なにこれ。

笑っちゃうの？

そこ、笑っていいところなの？

あれだけ、一人で色々ネガティブシンキングしまくったのに、笑って終わらすの？

疑問は晴れることなく、笑い上戸は容赦なく続く

「も、もう一人の本当の怪物とは漫才繰り広げるわ、それ以上の怪物らしい赤髪の彼氏とはいつでもどこでもべたべたするわ、食堂ではわざわざド真ん中で騒ぎ起こすわ、ぱ、パンツだけはすぐく見栄はってるわ、入学式では挨拶サボるわ、あんだ、もう、さ、最高だよね、ぷぷぷぷっ」

「……………」

負け犬

今。

こっで。

全存在を、否定された感。

もう。

……………立ち直れないかもしれない……………

「あ、あのフェオさま。あたしが悪かったですう。げ、元気出してください……」

「イルマ様、放っておきましょう。あの後ろ向きに大激走お嬢様は、一度前傾姿勢を身を以て心得た方がいいのです」

なら黙っていて貰いたい。

食堂から走って逃げかえってきた、私の部屋。

枕に抱きついて現実逃避している私の傍で、この二人が私に慰め風虐めをしてくるのだ。

「しかしお嬢様。よかったのではないでしょうか。少なくとも、あの人間はお嬢様のことを侮蔑したり、偏見や気に食わないなど思っている風ではなかったですが」

「……もーいいからほうつておいてよー……」  
ずたぼろだった。

負け犬として。

元男として。

『パンツ見栄はってる』

『イヴアとべつたり』

『キュートなはっちゃけお嬢様』

『愛くるしい顔』

私の頭の中で、反芻はんすうされる呪いの言葉。

「ふえええええ……」

死にたい。

舌噛み切って死のうかな。

そんなこと出来るくらいの度胸があつたら、今ここにいない。  
「……落ち込んでいるフェオさまも、なかなかグッドです！ 夫と  
してすごくそそられます！」

「そうですね。ざまーみやがれですね」

「あ・ん・た・ら・はあああっ！」

一向に黙る気配のない二人に、いい加減我慢の限界で、私は枕を

投げ飛ばして絶叫していた。

「なによ！ なーにーよっ！ 私なんてどーせ、いつだって後ろ向きでネガティブ思考爆裂で、そのうちっこい石につまずいて、後頭部ぶつけてぽっくりぱっくり死ぬのよ！ いいじゃない！ ざまーみるじゃないのよ！」

ベッドの上でバタバタしながら、なんかもう支離滅裂なことを口走っていたりする。

……さすがに、そんな私を見かねてか、ロゼはこほんっ、と一つ咳を吐いて、真面目な話題に切り替えるようだった。

「まあ、そうですね。そろそろ冗談はよしておいて、本題に移りましょうか」

「……………本題？」

暴れすぎたせいで息を切らしながら、おうむ返しに聞き返す。その問いに答えたのはイルマだった。

「はいです。さっき、フェオさまが逃げた後、色々聞いたんですけど」

### 要約

どうやら、私の今日の醜態はほとんどの所に出回っているらしく（写真付きで）、だがそれに関して、色々尾ひれがついていたらしい。

曰く。

『シュラプネルは、ホワイトヘッドを舐めきって、全力を出していないのだ』

曰く。

『全力を出すと、ホワイトヘッドに負けてるのがバレるから、魔法不能者など見え透いた嘘をついているのだ』

曰く。

『化物扱いされるのが嫌だから、わざわざ茶目っ気を取って、皆に好かれないんじゃないだろうか』

曰く。

『赤髪の貴公子イヴァ・イルとはデキているので、諦めた方が良い』

「……………」

最後のは全力でスルーするのは当たり前として。

「なんで、本当のことが流れてないのよ……」

完全無欠、嘘偽りないことを、全然信用されていなかった。

もはや、がつくりと肩を落とすしかない。

「どーやらみんな、シユラプネル家の人が、魔法が使えないなんて、これっぽっちも思っていないようです」

恐ろしい先入観だった。

初等学校的时候は幼さ故か、あまりそういうのはなかったんで、これは完全に私の想像外である。

「……というか、思ったんだけど、ここって一応世界最高峰の魔法学院よね。なんでこんくんだりないゴシップが流行ってんの」

「それは、ほんの上位クラスの一握りだけです。規模が大きすぎる為、下の方は普通の学校となら変わりはありませんし、試験すら違います。その為、有名人見たさに通う生徒など幾らでもいるでしょう」

そう言っつて、ロゼは横の人物を指さした。言う。

「これが最たる例です」

「なるほど」

納得の例だった。

「ロゼさんもフェオさまもひどいですよう……」  
なにやらばやいてはいたが。

「まあ、ともかく」

あっさり無視して、ロゼ。

「ともかく、基本的な状況はそんなに変わってない、という事ですね」

「……そうね」

どこか暗さを感じさせるロゼの声に、私は頷き返した。

そう。

結局のところ。

『魔法不能者のくせに生意気に最上クラス、さらに偉そうなシュラプネルの人間』から。

『実力を見せないくせに生意気に最上クラス、さらに偉そうなシュラプネルの人間』に変わったただけなのだ。

「大変だね、専属守護隊長」

「……全く。私のメイド人生は、今、最大に危機を迎えていますよ。一体全体どうしてくれるんですか」

私の軽口にも、思いっきり肩を落とすロゼだった。

(11) 疲れ気味負け犬の学友達(前書き)

荒唐無稽をこっけいむとう、とずっと勘違いしておりました。

携帯、縦書きPDFの方で変換できないようなので、アクセントを削除いたしました。



(11) 疲れ気味負け犬の学友達

翌日の学校。登校3日目。

今日は教室でイヴァと合流した。道中や廊下では口ゼがびつちりマーク。

そして。

「教室とか授業では専属守護兵その1さん、よろしく」

「宜しくお願い致します、部下その1」

「お前ら……」

その1さんが半眼で呻いていたが、この世界は男卑女尊なので無視させて頂く。

と、なんか最近セクハラ過多で、精神的女の子化が著しい気もするが、全くをもって気のせいであろう。

そう思わないと、やっていけない。

いくら元から、女9：男1であっても、その男1割に色々な誇りが詰まってるのだ。

「……そういえば誇りって……なんかあったっけ……」

よく考えると、負け犬根性ぐらいしか思いつかない。実はいないのかもしれない。

「はぁ……」

なんとなく憂鬱になって、ため息をつきながら私は自分の席に座る。幸いなことに、まだ白黒は来ていなかった。昨日の石化状態のままゲームオーバーになってくれているのかも知れない。

そんなことを妄想していると、前の座席に横向きで座ったその1さんがニヤニヤしながら私の顔をみつめていた。

「きもい」

そして私の思いがけず出た感想に、一瞬凍る。後に顔をぴくぴくと引きつらせながら苦笑した。

「あ、あのなあ……まあともかく、元気が出てよかったよ」  
保護者面していた。腹が立った。言う。

「うざい」

再度停止した。そしてすぐに再起動。なかなかしぶとい。

「お前、なんで二人きりになった途端、そんなふっきらぼうになるんだよ……」

「二人きりとか言わないでよ。他にもクラスの人もいるじゃない」  
数人ほどだが。

「……………お前、本当によく分からない奴だよな」  
と、なにやらその1さんが嘆息混じり、私に呆れていた。むかついた。

「分からないのはこっちよ。いつの間に他の女の子に手を出したのよ」

ん？

「じゃ、じゃなくて。いいから、必要以上に話しかけないでよ。誤解されたくない　って、あー、もう！」

「お前、何一人で赤くなったり青くなったりしてるんだよ」

間違えて某4文字熟語的な失言をしてしまったからである、放っておいて欲しい。

そうなのだ　実際にこの幼馴染が、色々手を出したりとか、そういうわけでは無いのである。だからこそ余計に、腹立たしいことこの上ないのだが。

主に元男として。

ガララッ　と、その時、勢いよく横開きの扉が開かれた。

どうやら、石化では勝てなかったようである。バジリスクさんも案外使えなかった。

「あら、フェオドル。今日も相変わらず、その太い寸胴を惜しげも無く披露して、恥ずかしくないのかしら」

むしろ絶好調らしかった。

そのまま、自分の椅子に優雅ぶりながら腰を掛けた。

「昨日　わたしなりに、あなたのことを考えてみたけど」  
お馴染みの表情で、アナスタシアは私の方に視線を向けて。

「　　やっぱり、あなた、演技してるわね。間違いなく。だって

」

……まだ勘違い継続中だった。よもやため息すら出ない。

私はこの馬鹿女とコミュニケーションしたくなかったので、その1さんに中継を頼むことにする。

「その1さん。私が嘘を言っていないってのを5歳児でも理解できるように、この白黒に説明してよ」

「はあ！？　な、なんで俺が？　じ、自分でしろよ、それぐらい」

……なぜか、すごく動揺していた。

なんだろう　その時、私の脳裏に閃くものがあつた。

『好きな女の子に話しかけられないダメ男が、友達に流れて話さないといけない風にされた時の、リアクション』

「イヴア……さすがに興味悪いと思う……笑えない……」

「な、なんだよ！　今日、お前おかしいぞ……ってあれ？　いつもか？」

「……おかしいのはあんたでしょうが。確かに見た目は悪くないけど、中身は最悪じゃないのよ」

「誰のことを言っているか知らんが、心を映し出す等身大鏡でも持つてきてやろうか？」

「どういう意味よ」

「　　あの、いい加減、理由<sup>わけ</sup>を話さして貰ってもいいかしら……」  
横を見やると、なんだか待ちぼうけ風のアナスタシアが、ひっそりと手を挙げていた。

こほんっ、と咳払いして話し出す。

「低俗な噂が氾濫しているけど、わたしはこの耳でしっかり聞いた

から。フェオドル、あなたが『特別』って言われたのを」

指一本立てて、すごく鼻が高そうに説明していたが

「……フェオ、何のことだ？」

「知らない」

何を言ってるのか。

しかし、今日の絶好調アナスタシアは、それだけでは挫けなかった。うざったく髪を払い除けながら言う。

「惚けても無駄よ。あのマクミレン教師が言ってたもの。他には『特質』だの『異質』だとかも言ってたかしら？」

「……まくみらん？」

誰のことだろう。聞き覚えのない名前だ。

だが。

「おい、それ本当かよ！？ 何で言わないんだ、お前は！ あー、そうか、あの人なら分かるのかもしれないな…… って、それ大丈夫なのかよ……」

「……ふえ？」

イヴアには分かったらしい。額に手を当てながら唸っていた。

これで理解できてないのは私だけ。前もこんなことがあった気がする。

まあそれはさておき。

「ねえ、マクミラン教師って誰？」

思い切って二人に尋ねてみると。

「は？」

同時に頓狂な声を上げられた。息ぴったりだった。

「お、お前な」

「テオニエイラ・マク『ミレン』、学院長よ！ 入学式でも話してたし、その後も呼び出されたでしょうが！」

それからすごい勢いで呆れられ、怒鳴られた。ミレンのところなんてめちゃくちゃ強調してくる。

「だったら、初めから学院長って言ってよ。名前なんて覚えてるは

ずないじゃないの」

と、私がややいじけながら言うと、ぴしっ　と音が鳴りそうなくらい、二人は硬直し

（……………ねえ、あなた。この子、本当に大丈夫なの？　色々な意味で）

（……………ああ、ちょっとな。世間ずれが激しいんだ。性格も歪んでるし）

なんだか仲良さそうに、お互い体を乗り出し、顔を近付けてひそひそ話をしていた。全部聞こえてる上に、私に失礼極まりない内容「で！　その学院長先生がどうかしたの？」

聞こえていないふりをして私は促した。イラついていたので、語調は強くなってしまいが。

その声に、ようやくと二人は体を離して、説明し始める。

「マクミレンってのは、現在で一番力を持っている魔道士って言われて、子供から老人まで、知らない人は普通いない、ってほどの人なんだよ」

「それだけじゃないわ。今回問題なのは、あの人の持っている特殊な力のことよ。これも常識なんだけど」

「魔眼だの、賢者の瞳だの、色々言われてるんだが、つまりは魔力<sup>アニメ</sup>を視認できるらしい。本当かどうかは知らないがな」

ところどころトゲがあるような気がしたが、それは再度スルーした。

……………それにしても、交互に話すこの二人。相性抜群なのかも知れなかった。いや、別にどーでもいいけど。

「　魂が見れる、ね」

言われて納得する。確かにそれなら身に覚えがあることだった。

特殊。

異質。

特異。

魔法不能者　　魂を持たない人外。

……………。

「いや、なんでそれで私が嘘をついてる証拠になるのよ。むしろ逆でしょうが」

ちよつと納得しそうになってから、ぎりぎりで反論する。

すると、白黒はいつもの表情よりさらにニヤリと笑う。口裂け女みただった。

「あの人が『特別』と言ったからには、あなたはやっぱり特別なよ。そしてそれを隠すために、わざわざあんな手の込んだ芝居をしているのよ！」

ビシッ！　と指を差されて断定された。もう、何を言っても聞かなそうである。

「もう勝手に言ってなさいよ……………」

私はあつさり匙さじを投げるが、難攻不落の莫迦女は、留まることを知らない。指を差したまま口上は続く。

「何と言われようと、わたしはあんたに本気を出させるつもりよ。

まずは手始めに、毎日身体測定の結果を口づさみながら登校してやるわ！」

地味な嫌がらせだった。

「その次は、そうね　」

他にも色々言っていたが、あまりの荒唐無稽さに、そこから先は手で耳栓をして聞き流すことにした。

「ふええええ……………」

呻き声が、お昼時のがやがやとうるさい教室内に、それほど響かずに沈み落ちていく。

私は自分の机に体を預けてぐったりとしていた。

その周りで。

「あつはははは！ 今日2キロでリタイアか！ いやいや、相変わらず面白いなあ」

「ヒルダっち、笑い過ぎだよ。フェオたん、魔法も使わずに疲れてるんだからさ」

なぜか、クラスメイトが空き椅子に座りながら談笑していた。

一人は、昨日私を辱め<sup>はずかし</sup>ていった、男前笑い上戸、ヒルダさん。

もう一人は、そのヒルダさんと同じ中等から来たらしい、リアナさん。

「……なに、この状況……」

普通にお友達、なのだろうか。

よく分からない。策略謀略は一体どこに消えたのか。フレンドリに振る舞って、後で食べるつもりなのか。　　ってかそもそも友達ってなんなのだろう。どこまでいったら、なにしたら友達と呼んでいいのだろうか。

……最後のは、なにやら怪しい雰囲気聞こえなくもないので、取り消しておく。

「なに呟いてんの、フェオたん？」

リアナさんが、私の頭元で尋ねてくる。

「……そのフェオたんっての、やめてくれないかな……」

私は力なく体を起こしながら、懇願する。

だが、リアナさんは不満そうに口を尖らせていた。

「えー。フェオたんいいじゃん。かわいいじゃん。ぴったりじゃん」  
どうやら、やめる気は更々ないらしい。

このリアナという人物は、なんというか、ごく平凡の子、みたいな感じである。

これまでの、どの登場人物よりも常識味に溢れていて、社会性がありそうで、普通感が漂っていて。

……だから、一番苦手だった。

「フェオ。大丈夫か？ 飲み物でも持ってきてやろうか？」

そのいつものフレーズと共に、私の背中をさすってきたのは、言うまでもなくその1さんである。目つきが悪い不幸面に、心配さを滲<sup>にじ</sup>ませていた。

だがしかし、その心配は、今はすごく遠慮して欲しいところだったのだが、そんなことをこの生真面目<sup>むっぴり</sup>目野郎に言ってもどうにもならないことは、もう理解しきっていた。

案の定、2人がにひひつ、と人の悪い笑みを浮かべる。

「おやおや、いつもながら見せつけるねえ。持久走の時も初めから終わりまでべつとりしてたし」

「フェオたん、いい彼氏がいて羨ましいのう」

その2人の安っすい挑発に食らいつくイヴァ。

「か、彼氏!? べつとり!? いや、そうじゃなくて、って

……」

そこでどうしてか私の顔色を窺う。こういう時に限って私に気を遣うという、ダメ男ぶり。

「……それ、本当に違うから。こいつはただの幼馴染で、ホントなんでもないから」

むつつりダメ男を代弁してから、私はふらふらと立ち上がった。

疲れているときに無駄なエネルギーは消耗したくない。引きこもり負け犬は、この化物共と違って繊細なのだ。

「ん? どこに行くんだ、フェオ」

「ちよつとトイレ」

「そうか」

適当に嘘をついて、教室から 3人から離れようとして

………

「 どうしてついてくるのよ」

振り向くと、イヴァを先頭に、至極当たり前と言わんばかりに、私の後ろに付き添っていた。

どうしてか全員びっくりした顔で弁解する。



「いやだつて 嫌だけど一応部下1だし」

「おもしろそうだと思っただんでつい」

「フェオさんのトイレシーンを」

三者三様、一人以外、よく分からない理由で付き纏まとわれていた。

……なんだか無性に腹が立ってくる。こいつら、どうあっても私を休ませない気らしい。

ならば。

「あ、外にマクミレン学院長が飛んでる！」

「……は？ 何言っ」

「え、まじで！？ どこ！？」

「フラッシュチャンス！」

秘儀『あ、UFO』作戦はアホらしいことに成功した。

私はその隙に教室を飛び出し、廊下を走り逃げていった

## (12) 絶体絶命負け犬の救世主

「ふへー……」

ようやく辿り着いたのは屋上。違う棟なのでそう簡単には見つからないだろう。

手すりなどはなく、ただ単に出れるだけといった風だ。

私はちよつとした端の段差にもたれて、またしてもぐったりと体を投げ出していた。

授業、一日目。午前の部。

実のところ、私はかなり参っていた。

肉体的にも 精神的にも。

…… 本当に飛んでくる『手が滑った灼熱玉！』  
ラグト・ボルト ファイヤ・ボール

他にも『足が滑った白電撃！』や『見間違えた蒼冥光弾！』など、  
エル・スタック ブリアント・デルタ

果てには『なんとなく火灼霊！』まで飛んでくる始末。

それだけではない。

先程のような『赤髪の貴公子、イヴァ・イル？キュートなはちやめちやお嬢様、フェオドル・シユラプネル』攻撃が、私に決定的なダメージを与えてくるのだ。

他にも、アナスタシアは家同士の決着をつけるためかどうか知らないが、今日一日だけで私の全肉体のサイズを4周ぐらい口ずさんでくる。地味に蓄積する鬱陶しさである。  
うっとう

「もう、死ぬう……」

力なく悲鳴を上げてみても、それらは何も解決しない。

つまるところ、一体何が起きているのかを詳しく説明しよう。

まず主に下の方のクラスから『シユラプネル腹立つ、力暴いてやろう大作戦』を受けているのだった。

ランニング中に鉢合わせた、はたまた魔法訓練に同じ場所を使っ

ていた。

とにかく至る所で攻撃を仕掛けられる。

さらに性質たちが悪いことに、この世界の一般的に化物と言われる人間達は、灼熱玉ファイヤ・ボールなどをぶつけても、蚊に刺されたぐらいにしか効かないようだ。

向こうからしたら、たまたま落ちていた石をこちらに蹴っ飛ばした、ぐらいにしか感じていないらしく、報復も考えずぽんぽんぽんと悪戯気分。

その石ころに心底ビビりながら、ぜえはあと息を切らしている私にくっついて部下その1さんが大活躍。

飛んでくる火球を拳で殴り潰し、撃ってくる青い光弾を体で受け止め、突如現れた大量の火の粉を突風で術者ごと吹き飛ばす。

……平然とした顔で『フェオ、大丈夫か？』などと声をかけてきながら。

そして始まる、クラスメイトの虐め。

奴らは、私が魔法を使えないように見せるためのカモフラージュとして、イヴァに守って貰っているのだと勘違いしてやまない。

完全に『化物扱いされるのが嫌だからわざわざ茶目っ気を取って、皆に好かれたいんじゃないだろうか』案が、教室内では採用されているらしく、ヒルダを始め全員が第三者として楽しんでいやがった。

上の方のクラスは、あくまで『自らの家の軍事力くを顕示し合う』が最優先のようで、直接ちよっかいを仕掛けてくることはなかったが。

それだけは良しとするべきなのだが……なんだろう、素直に喜べない。

ちなみに唯一の助け人口ゼット守護隊長は、先程逃走しながら探してみたものの見つからなかった。

いざという時の可愛らしいメイドさんは、本日は非番のようだった。寮にでも戻っているのだろうか。

「ロゼの裏切りもののお……」

腹いせに私が逆恨みの声を上げたその時である。

「おい。こんなところで何してんだよ、お前は」

「にやいつ!？」

いきなりの声に反射的に体を跳ね起きさせると、いつの間にかそこには怒気を撒き散らすイヴアの顔。

屋上への扉が開かれた気配は皆無だったのだが。

「外から登ってきたんだよ。いきなり居なくなるから」

疑問が顔に出ていたのか、説明するイヴア。言いながら私の体をまたいで詰め寄ってくる。

「な、なによ」

思わず動揺しながら後ろずさるうとするが、すぐ後ろは崖っぷちのため逃げられない。

と、そうこうしている内に私の鼻の先まで、ずいつ　と彼の顔

が近付けられ。

「ち、近い……」

お互い息がかかる距離まで寄せてくる。

この顔をすぐ近付けてくるのは彼の癖で、本気で怒っている時は、なぜかこうしてくることが記憶に残っていた。

「……分かってんのか。今俺がここに来るまでに、もしかしたらお前殺されてたかも知れないんだぞ」

耳元で、凄みを効かせたような声で言う。

顔を逸らそうとしたが、顎に手が添えられていてそれすらも許してくれない。

「ご、ごめん……なさい……」

私は柄にもなく普通に謝っていた。

確かに今回の件で私に弁解できる要素は無く、危険を冒していたことも百も承知である。彼が怒るのも無理はない。

だが、いつもの私なら反論しただろう。それをしなかったのは「謝るんだっただろうして俺から離れたんだ。お前だって死にたく

ないんだろ」

反論しても、この説教モードに入っちゃったイヴァには通用しないからである。

5年ぶりに再会して初めてのマジギレ。こうなったら刃向わずに謝るのが良策なのだ。

「うん……ごめん……ごめんね……」

普段ひねくれている子が、こう落ち込んだ風に振る舞う破壊力は抜群である。

ポイントは、俯き加減で視線を上目遣いにする。涙目にするとなお良し。

って、私つくづく性格悪いな……

負け犬、性根の悪さは天下一品。

しばらくして、イヴァは「はぁ……」と深くため息をついてから、「もういい。これからは黙って居なくなったりするなよ」

と言って、ようやく私から顔を離して立ち上がってくれた。

……ちよっぴり怖かったので、顔が赤くなっている気もするが、一応これで負け犬ミッションは成功である。

と思つた矢先のことだつた。

「ベリルにも、お前を守るよう頼まれてるんだ。何かあつたらあいつに顔出しできない」

「……………え」

彼の不意に放つた一言が、私の動きをピタリと止めた。

一瞬でその言葉が頭を突き抜けていって。

ようやく認識する。

ベリル。

妹。

なぜかそこで出てきたのは妹の名前だつた。

お母様でも、お父様でもなく。

私の妹。

別にそれだけのことなのだが。

「ベリルが、私を？ あの妹様が、私に情けをかけてくれたってわけ？」

私は聞き流すことが出来なかった。

未だ地面に横たわったまま、馬鹿みたいに食いついてしまった。

「情けって……そんな言い方するなよ。あいつだって、お前を心配してるんだぞ」

「心、配？ なにそれ。憐れみの間違いでしょ」

「……………？ おい、フェオ。どうしたんだよいきなり」

「さすが、完全無敵最強妹はやることが違うわよね。こんな欠陥人外最弱姉に情けを与えられるなんて、本当にいい人間してる。大した大物よね。いつだって、どこだって、なんだって、私に迷惑を掛けられてるのに、まだそんな余裕があるんだ。だったらそのまま跡継ぎだつ」

「フェオ！」

張り上げられた彼の声には、だが怒りは無かった。

……青ざめていた。

自分の失態に気付いたような、そんな顔をしていた。別に彼は何も悪くないのに。

悪いのは私だ。それ以外の誰でもない。

そんなこと自分でも分かっている。

分かり切っている。

けど。

「あんただって、そうなんでしょ？」

最低な、八つ当たり。

その言葉に。

「っ……………」

どこまでも生真面目で、優しく、いつだって気遣ってくれる幼

馴染は、返事することが出来なかった。

私の幼馴染は、私と違って嘘などつけない真人間だから。

そんなこと昔から知っている。

……知り尽くしているのに。

「もう放っておいて」

シヨックなど受ける権利すらないのに　私は起き上がり、駆けだしていた。

力いっぱい貧弱な身体で扉を蹴り飛ばし、その場から逃げ出した。

負け犬、脱走。

開き直ると決めて、一目目にして逃走。

イヴァから、ロゼから、イルマから　他の全てのことから。  
目標の一週間。

最初はそれだけ耐えれば、この学校が追い出してくれるものだと思っていた。精々、恥を晒して、恥をかかして屋敷に戻ってやろうと思っていた。

ただどあのエロ学院長のせいで、それは無理だということが判明してからは、取りあえず彼らに縋<sup>すが</sup>って自分らしく一週間ぐらいは生き延びてやろうと目論んでいたのだが。

「馬鹿みたい、私」

そんなこと全て分かっている、縋ろうとしたのではなかったのか。イヴァは憐みと頼まれて。ロゼはメイドとしてのただの義務。イルマは　私のなになが気に入ったのだらう。

「……見た目？」

それぐらいしか思い浮かばない。

実はポケットに昨日の写真を忍ばせているのは秘密である。

没収した後、捨てようとして捨てられなかったのだ。

「……写真観賞なら、ギリギリセーフよね」

誰に対する言いわけなのか、私は呟きながら空を見た。

真っ黒だと思っていた夜空は、輝かしい星のせいで若干の青さを帯びている。

奇妙な類似点で、あの世界と同じ星座つばいのがあったりする。

午後の授業をサボって、誰にも見つからないように色々な校舎の影だとかに身を潜めて、現在は夕食時。

寮にも帰らずに 帰れずに、私は夜の学院敷地内をうろつとぶらついているのだ。

敷地内。踏むと案外弾力がある芝生。石が敷き詰められた道に、沿うようにして魔法の光が照らしている。

この魔法の光は、それ専用の職人さんがいるらしく、光の質や同時点灯数などで職人の価値などが決まるらしい。

このような魔法技能職は他にも色々あり、水道を管理する風水士

……ぐらいしか知らなかった。

「私には無関係だしね」

興味が無いことを、覚えていられる人間などいない。

「いや、私、人外だし」

言い直そう。

興味が無いことを、覚えていられる生物などいない。

……ちよつと言いついていいのか微妙になってきた。というか、そもそも魂がないから生物ですらなかったりするのか。

などと、とりとめのめないことを考えていると、やはり疲れているのか、足がふらついて

「いにやっ」

芝生の上に顔面からずっこけてしまう。この芝生、なんか硬くて尖っていて。



「つていだだっ！？」

刺さった。頬。刺さりまくった。

それからいつものように、痛み忘却殺法に移ろうとして

（転がったらまた刺さる！）

思い留まって、その場でくねくねともがき苦しんだ。……傍から見たらすごく変な人だと思われること間違いなしである。

「ふえええ……」

なんとか収まってから仰向きで大の字になる。背中がチクチクしたがり上がるのがしんどかったのだ。

負け犬、色々と満身創痍。

……まだあの屋敷おんしつから連れ出されて3日目の晩。

もうHPは一桁にまで削り取られていた。最初から一桁ぐらいしかないだろお前というツツコミはNGである。

今、モンスターに遭遇したら逃走コマンドも使えそうにない。

逃走コマンドを使おうとも思わない。私のSP 精神的ポイントポイントは酷いダメージを受けていた。

「……一人で勝手に酷いこと言つて、一人で勝手にダメージつて……」

部下その1さんもいい迷惑に違いない。

あの、むっつり生真面目野郎のことである、どーせ気に病んでいるに違いない。馬鹿だから。

……それ以上に病んでいる私はもっと馬鹿だということか。うるさい、放っておいて欲しい。

などなど、先程から後ろ向き脳内発言でびっしりである。

登場人物が私一人だと、ここまでネガティブスパイラルに陥るのだ。

一度イルマの脳内でも覗いた方が良いのかも知れない。偏見だが、あのレスビアン気味小動物の頭は、ピンクいこととエロちっくなことで埋め尽くされていることだろう。

「レス……」

私、人のことと言えるのだろうか。正直男に、言葉にすることもはばかれることをされたいとは、爪の垢ほども米粒ほども思わない。ごくごく当たり前である。

ならばつまり、私は一生純潔ということで、前の人生はどうだったかなんて、聞くほど野暮な奴はおるまい。ようするに。

「童貞処女で死ぬの、私……」

なんだかすごく虚無感に襲われる。      というか魂の無い私は果たして妊娠とかしたりするのだろうか。

……いや、あまり考えたくない。一応元男にはきつつい話題なのである。

その時。

ぐうう……。

腹の虫が、生命の継続を求めてきた。

「……………」

一瞬、考えて。

「帰ろう」

決断は案外早かった。

満身創痍の体をよつこらせ、とおばちゃんみたいな掛け声と共に起こそうとして。

それにぶつかった。

「……………ふえ？」

初めに思ったことは、うちのゴージャスベッド並のフカフカ度合。次に思ったことは、何か暗いなー、ということ。

その次に思ったことは、なんでこのゴージャスベッド、暖かくて生きてるみたいに動いてるんだろうと

「……………エンカウント……さん？」

なぜ『さん』付なのかは私も分からない。

とりあえず状況を確認しようと、頭上を見上げてみた。

なにやら、不自然に明るい夜空が切り取られていた。その切り取り線を辿ってみる。

猫のような、トラのような、某四角錐の墓を守っているアレのような。

結論。

大きく息を吸い込んだ。ここ3日で一番大きな声を出す必要を感じたからである。

そして。

「いにやあああつ！？ 化け物おおおつ！？」

絶叫しながら背後に向かって全力でほく前進。手が痛かったが、そんなことを気にしている場合ではない。

一通りほく前進をした後、なんとか立ち上がってよれよれと走り出す。まっすぐ走れているかは分からないが、とにかく必死である。

つい先程、自分で逃走コマンドを選ばないとかどうだとか、そんなことを言っていたような気もするが、断じて気のせいである。

いくつかの道をまたぎ、いくつかの光に照らされ、いくつかの建物を見かけたところで。

その建物の影に入ろうと角を曲がった、刹那。

ふわりと。

体が浮く。

「え」

足を引く掛けられたのだと気づいた時には、もう地面に倒れこんでいた。

「っ！？」

痛みに対する反応よりも先に、生命の危機を感じたのか、私はすぐに辺りを確認して。

すぐにその原因を見つける。

3人。制服。男。顔は暗くて分からない。だけど、なぜか表情は

見えた。

……笑っている。私を見て、笑っている。

「おいおいおいおい、本当に魔法を使えねえのかよ、こいつ」

「だからそう言っただろうが。信用してなかったのかよ」

「信じてなかったわけじゃねえけどな。ってか、だったら第一こんなことしねえよ」

笑っていた。

逃げ、なきや。

これは、このパターンは、まずい。

「へへへ、そうだな。　　っとおっと。逃げられないぜ、シュラ

プネルさんよお」

「っ！？」

掴まれた。どこを掴まれたのかも分からない。

振り払おうとしても、びくともしない。

「……これじゃ完全に悪モンじゃねえか俺達。見てみるよ、すっげえ嫌がつてるぞ？」

「そりやそうだろう。ここで嫌がらなかったら、逆に引くだろ」

嫌。

怖い。

さっきの化け物なんかより、この化物達ニンゲンの方が怖い。

恐怖で声が出せない。

助けを呼ばなければならないのに。

……誰に？

「それにしても、やっぱ美人だよなあ。さすがシユラプネル」

「関係ないだろ」

「いやいや、ホワイトヘッドだって美人じゃねえか。なんかあるんじゃない？」

「まあ美人ってことは認めてやっても構わないが、可愛げは無いな。主に性格が」

誰も　　いない？

イヴァも、ロゼも、イルマも。  
逃げた。私が自分から逃げた。

ヒルダさん、リアナさん アナスタシア。

誰に助けを求めるつもりなの？ あいつらは私の天敵じゃないのか。

「だけど俺の大事な幼馴染なんだ」

幼馴染？

「……はい、幼馴染です」

会話してどうする。

逃げなければ。

一刻も早くここから逃げなければ。

いつの間にか掴まれていた手が離れていた。

足はすくんで動かないからまた手で這っていく。これで逃げ切れるとは思わない。でも逃げなきゃ

「おい、フェオ」

逃げ切れなかったら今度こそ舌を噛み切って死んでやる。こんな薄汚い奴らにやられてたまるか。

「……なにやってんのお前」

「嫌っ！ 離してっ！ 離してよ！」

なぜか声が出た。でもこんな物陰で助けなど来るはずもない。

とにかく逃げるしかない。  
と。

ぺたっ と指先が何かに触れた。

地面からなんか出っ張っているような置いてあるような横たわっているような、生暖かい人肌みたいな障害物。

……人肌？

横たわる人。横たわり人。寝ている人。寝転び人。死んでる

人。死人。……死体？

「いにやあああつ！？」

「やかましい」

ポカッ！ となにか軽い音がするような、でも決定的な打撃が後頭部に当てられて。  
私の意識はそこで途切れた。

(12) 絶体絶命負け犬の救世主(後書き)

最初から設定や展開を考えすぎたせいか、逆に次の展開やらなんやらが難しくなっていました。

さらにシリアスがどうやら下手糞だったようで、コメディー展開じゃないと書けないという悪循環。

どうしましょうこれ。

(13) 追い詰められた負け犬の決断

「……おはよう」

誰もいなかったが、なんとなく挨拶を試みる。

起きたのは自室のベッド。着ているのはパジャマで、制服は横にきれいに畳んで置かれていたり、ハンガーに掛けられたりしていた。芝の付着や泥汚れなどは一つも見られない。

「魔法……か」

屋敷のメイド達が常日頃から、洗濯が大変だと愚痴をこぼしていたことを、思い出していた時だった。

「おはよう、フェオドル」

先程の挨拶に返事するように聞こえたのは、声だけでも表情が窺い知れるような、無駄な自信に溢れているようなもの。

声の方を見やって、私は尋ねた。

「……なんであんたがいるのよ」

そこには絶好調の笑みを浮かべた、アナスタシアが制服姿で直立していた。こちらはまだベッドから体を起こしただけの体勢のため、見下ろされている感が腹立たしい。

「ちなみに今は昼休みよ。おはようと言うのは的確じゃないわね」

「だからなんであんたがいるのよ」

「鍵が付いていないもの。簡単に入れるわよ」

そういえばそうだったか。というかそれ、寝ているときに寝首とられ放題ではないのか。随分と危険を冒していたものである

「……………昼休み？」

はっ、と気付く。なるほど、イルマがいないのはそういうわけだったのか。そしてこいつがここに来たのも昼休み中だからというわけである。と、一つ一つ疑問が解消していく。

「イヴァ・イルが死にそうな顔をしていたわよ。あなたも昨日からダウン中で、あの俗物共が変な憶測を乱立していたわ」



「俗物？ ああ、クラスのことね。まあ他人事ほど楽しいものはいんじゃないの」

「そうかしら。わたしはくだらないと思うけど。あんなもの、誇りを持たない人間の馬鹿な遊びよ。ゴシップを立てる暇があるのなら、呪文の一つでも覚えていればいいのに」

「……あんだだって、私のゴシップに拍車をかけた一人なんだからね」

「はい？ なんのことかしら」

全く無自覚だった。私が力隠してる説は、この白黒が燻った部分がかかなりあるのだが。　てかそもそも、なんでこんな普通に会話が成立しているのであらう。自然すぎて何かが不自然だ。

「……そういえば、なんであんだ、ここに来たのよ」

気付いて、ため息交じりにそう言つと、彼女は一瞬ぴくりと動いた。いかにも忘れてました、的なリアクションである。

「これよ。読みなさい」

即座にポケットから出した二つ折りの紙切れを投げつけてくる。

特に指示に逆らう必要性も感じなかったので、ごく普通に開いてみる。

「……………ふーん。なるほど、ね」

そこに書かれていたものは、挑戦状と脅迫状。

十三条。

五年前。

二つの言語<sup>ワード</sup>が、紙いっばいに大きく書かれている。自信満々な字だった。

「あなたのこと、勝手に調べさせてもらったわ」

聞いてもないのに、喋り出すアナスタシア。

「誕生日は四月一日。歳は十五。出身はここ、イングヴェルグ。初等<sup>初</sup>等<sup>等</sup>は少し離れた辺境にある。分かったのは場所だけ。学校名、過去に在籍していた生徒、教師、それらは何も分からない。どう考えて

も隠しているわね。それも嚴重に。それでもしらみ潰しに調べて、出てきたものはその言葉よ」

私の手に握られた紙に指を差す。この指差すのは癖らしかった。彼女の口上はまだ続く。

「『五年前』。それ以外に何が分かつてるのかを教える気はないわとにかくそれ以降、あなたは郊外の屋敷に隠遁していたらしいわね表に出ていたのは、全く同じ顔をした妹だけ。正直名前を聞いたときは驚いたわ。本当に瓜二つなのね」

「……そうね。別に双子じゃないのに、嫌味なほど。おかげで比べられて困ってるのよ」

「嫌いな？ 妹のことが」

「嫌う権利すらないわよ。負け犬には」

やはり私は、妹の話題には食いついてしまいうらしい。劣等感もここまで来ると大したものである。

ともかく。

「よく調べたわね。大したもんだわ」

普通に称賛する。だがこの女のことだ、これが私の『特別』である根拠とでも思っているのだろうが 話は単純、私の魔法不能者っぷりを隠そうとした親の工作に違いない。

五年前というのは、私がとうとう嫌になって、引きこもり宣言をした年号である。

「じ、事実は小説より奇なり……」

「な 何笑ってるのよ！」

思わず腹を抱えて笑ってしまった。

「とにかくっ！ こっちはあなたの秘密も握ってるのよ！ 観念して、決闘を受けなさい！」

また指を差して、声を荒げるアナスタシア。笑ったのが気に食わないらしい。まあタイミング的に『それだけ？ プップー、あほらしー』と取られなくもないが うん、実際思ってるけど。

「け、決闘って、この『十三条』ってやつよね？」

「そうよ！ 分かってるのだったら笑うのを止めなさい、フェオドル！ わたしは真剣なのよ！」

未だ笑いが止まらない私に、顔を真つ赤にして怒っていた。

十三条。コンスタンティア魔道学院、学則十三条。わざわざ十三を使っているところなどが、いやらしい。

それは決闘である。基本的に法律でも学則でも、人に向かって攻撃魔法を使用してはいけません、という根底をひっくり返す、決闘という名の観客動員私闘である。

学校側に申請をして、時間設定から場所設定、結界まで張って、怪我人まで見てくれる出血大サービス。『自分の家の力を誇示する』という目的に於いて、これほど配慮してくれた制度はなかるう。聞くところによると、毎年五十件ぐらい申請されるらしい。

全く、見る分には楽しいだろう。他人事の喧嘩ほど楽しいものはない。私だったら野次を飛ばすこと大請け合いです。

なら当事者なら？

決まってる。

死。

「受けるわ。その代わり条件を出してもいい？」

その言葉に、一瞬両手を挙げて喜ぶ素振りを見せようとして思い留まって冷静を装っていた。こいつ、案外かわいい奴なのかも知れない。

こほん、と咳払いして言う。

「ば、場合によるわね。言ってみなさい」

「……あんたの目的は、私の实力を知りたいってことなんでしょ？ なら、先手は私からってことで」

「先手？ どういう意味？」

首を傾げる彼女。私はぴつ、と指一本立てて説明する。

「私が、初めに全力で魔法をぶっ放してやるわよ。それを無事受け止めたらあんたの勝ち。防御を突き抜けてあんたをぶちのめしたら私の勝ち」

こうすればより分かりやすく、観客に私が魔法不能者だと信じて貰えるだろう。何をする暇なく、吹っ飛ばされるのは呆気ない。

「……それでもいいけど、決闘は片方が戦闘不能だと教師に判断されるまで終わらないわよ」

怪訝そうな顔をする。だが、それは簡単な話だ。

「簡単よ。あんたが防ぎ切ったなら、好きなだけ私に反撃してきなさいな。灼熱玉でも、あの氷零炎爆槍とかでも、何でも」

ファイヤ・ボール

ゼル・ブレイズ

「好きな、だけ？　それは防御魔法も使わないということかしら。言つとくけど死ぬほど痛いわよ」

死。

死ぬ。

どうせ死ぬなら、イヴァやロゼやイルマに、縋って縋って、昨日みたいに惨めに死ぬよりも。

「……望むところよ」

ド派手に、後腐れなく死んでやろう。目立ちたがり、シユラプネル家の一員として。

完全に予想していたことだが、放課後、窓から不法侵入してきた説教モードイヴァさんが、私の寢床の傍らで仁王立ちしていた。

「お前！　決闘って、一体どういうことだ！」

ブチギレ。昨日のしょんぼりイヴァさんは何処へやら。正直怖いです。男の人の怒鳴り声怖いです。泣きそうです。

「だ、だって、昨日の襲われたのだって、あの噂のせいだし、それを解消するには打ってつけじゃないのよ」

ちよつと言いつくとしては苦しい。よく考えてみると、理由になつてもいなかった。

「噂？　お前が力を隠してるってやつか？」

昨日はどう考えて

も、お前が魔法を使えない前提で狙われてただろうが！ 忘れたのか！？」

より一層、声を張り上げる彼。

……まことにおっしゃる通りです。でも素直に決闘を引き受けた理由を説明してどうなるというのだ。下手したら提出した許可願を、夜間学校に忍び込んで破り捨てに行きそうな雰囲気である。

説明しなくても、この幼馴染コンプレックスの男ならやりそうではあった。ああ、ここでの幼馴染というのは妹の方である。

「昨日のことは謝る！ 本当にすまなかった！ でも、だからって腹いせにこんなことしなくてもいいだろ！？」

「……腹いせ？」

そうか、これは腹いせだったのか。確かにそうかも知れない。案外私って、根に持つ奴なんだとしみじみ自覚してしまう。

とにもかくにも、許可願を破られないために、どうこの男を丸め込もうと思っていたその時、意外なところから助け舟が飛んできた。

「イヴァ様。大丈夫です」

ロゼ、だった。メイドとして、義務でついて来てくれている、私の専属守護隊長。

彼女の淡々とした口調に、イヴァが意表を突かれたように、がばつと振り返る。

「大丈夫です、イヴァ様。そのひねくれお嬢様のことです。何か矮小卑劣な考えでもあるに決まっています」

変わらず淡々と、失礼なことを混ぜつつ援護射撃。ここからでは玄関の方に体を向けたイヴァの顔は見えないが、恐らく呆気にとられていること間違いなしである。

「大丈夫……って、本当にそう思ってるのか？ ロゼ、こいつは魔法不能者だぞ？ なにかあったら怪我じゃ済まないんだぞ？」

「分かっています。その上で、大丈夫だと言っているのです。その前向きに後ろ歩きお嬢様は、常日頃からやる気なんて皆無ですが、

やると言ったらやります」

「だ、だが……」

まるで根拠のない弁解だったが、なぜか丸め込まれるイヴァ。そして、最後の一押しに残っているもう一人。

「イヴァさん。ロゼさんはずっと学校に来る前から、フェオさまと一緒に暮らしてたんですよね。なら、今回は昔の幼馴染さんより、現在の付き人さんの方が、正しいと思いますです」

私のベッドの足側に、備え付きの椅子を引っ張ってきて、ちょこんと座っているイルマである。なぜか椅子の上で正座して、発言しながらガツポーズなどをしていた。相変わらず変な子である。

「ですよ、フェオさま？」

「ええ！？ え、ええ……」

いきなり振られて、思わず驚いてしまった。だがそれが決定的になつたらしく、イヴァは俯いて黙り込んでしまった。理解はできないが、納得した、という感じなのだろうか。

と、その時パチンッ！ と両手を叩き合わせる音が鳴ったかと思えば、イルマが私のところに飛びついてくる。

「わわわっ！？ い、イルマちゃん！？」

私、情けなく大驚き。だが、彼女は構わずに私の足を持ち、ベッドから引きずり出していた。

「そうと決まれば、今からフェオさまはお風呂タイムです！ 服は替えたものの、昨日から一度もお体を清めてないので、汗とかびっしょりなのです！」

なんだか不吉さを感じさせるセリフなどを言っていた。なんとなく彼女の目的が把握できたので、必死に抵抗するが。

「い、いや分かったから。ひ、一人で入るわよ。入るから離して！」  
懇願しながら抵抗してみたものの、なぜか手が外れない。

魔法！？

「むふふ……」

イルマちゃん。最低な笑みを浮かべていた。

本気だ。こいつ、本気だ。

「いにやああっ！ イヴァ！ ロゼ！ 助けてええっ！」

足を引つ張られ、床を引きずられながら助けを呼ぶ。だが。

「……そ、それじゃあ、俺、寮に戻るから……」

顔をなぜか赤らめてイヴァ。この野郎、なんかピンクい妄想してやがる。

「私も自室に戻ります。勝手に乳繰り合って下さいませ。感想は後でじっくり聞きます」

いつもの鉄仮面のまま、がちやりとドアノブを捻るロゼ。完全に見捨てていやがった。

そして。

バタンっ      と扉が閉まる音。ばさっ      とカーテンが一際揺れる音がして。

「むふふふ…… フェオさまあ…… 一緒に体洗いっこしましょうねえ

……」

食べる側と食べられる側だけが、部屋に残されて。

「いやああああっ!？」

またしても、絶叫は誰にも届かなかった。

(14) 爆発する負け犬の本音(前書き)

セーフです。

章を削除いたしました。



(14) 爆発する負け犬の本音

なんとか、お互いタオルで身体を隠すことを了承して貰ったものの。

「ふへへへ……」

名目は背中流し。背中を指先で触ってくる。触り方が、完全にセクハラだった。

「ふえ……」

タオルがズレ落ちないよう支えながら、目をぎゅっと瞑り、必死に耐えていた。元男の精神的に、現女の貞操的に、大きな山場を迎えているのである。

魔法が使えないことを、これほど恨めしく思った瞬間は無い。もしかしたらイルマちゃん、これまで私の関節技を無抵抗で受け続けてきたのは 止そう。考えたくもない。

「フェオさま、気持ちいですか？」

背中越しから、もはやエロちつく発言にしか聞こえない。

「……も、もういいんじゃないのかな……んっ……」

刺激して事に及ばないよう、遠回しに抵抗の意思を示すが、一向に彼女の手が止まることはなかった。

「……あうう……」

そのうち、なんだか頭がぼんやりしてくる。風呂場の熱気と、極度の興奮でのぼせていた。瞼の裏しか見えないのに、真っ暗な視界が回転しているような錯覚を覚え始めた頃、イルマが唐突に言った。

「泣いてました」

「……ふえ？……」

一瞬遅れて反応するものの、何のことを言われたのか、ちっとも分らなかった。

だがこちらの理解を待つつもりはないらしい、彼女は続けた。

「ロゼさん。昨日も。今さっきも。すごく悲しそうに、泣いてました」

「ロ、ゼ？ 泣いてたって、ロゼが？」

思わず、目を開けてしまう。なんで開ける必要があったのか、私にも分からない。

「……昨日、フェオさまがイヴァさんに抱えられて帰って来たとき、ロゼさんがどれだけ泣いたと思います？」

「イルマ……？」

いつの間にか彼女の手が止まっていた。声には、泣いているようにさえ聞こえる震えが混じっていた。

「泥だらけのフェオさまにしがみついて、私のせいだ、って一晩中、イヴァさんにも、何で離れたんだって、みっともなく当り散らしてあのロゼさんがですよ？」

いや、違う。

怒りだ。私に対しての、怒りだ。

「それからフェオさまには、このことは言わないでくれって。フェオさまは心配されたり同情されたりするのが、一番嫌いだから言わないでくれって。ロゼさん、泣きながらそう言っただけです」

「……そう」

私はただ頷くしかできなかった。開いた視界は、のぼせて、ぼやけていた。

「それで今日の決闘騒ぎです。何重にも何重にも嚴重に魔法施錠を掛けて、それでも心配そうにロゼさん、学校に向かって、放課後の掲示板いっぱい、それが張られてたんです。それを見たロゼさん、一体、どんな気持ちだったと思いますか、フェオさま？」

「……………」

あいつ。

「いとも簡単に破られて侵入された拳句、よりにもよって決闘ですよ？ ロゼさんからしたら、力の無さを嫌というほど実感させられて、その上フェオさまから見捨てられたように思ったはずですよ。」

最後に、さっきのフェオさまの言葉」

イルマは、そこで一旦、言葉を切った。抑えきれない怒りを、無理やり抑え込むように、私に告げた。

「フェオさま。あたしですら気付いたことに、ロゼさんが気付かないとも思ってたんですか。イヴァさんは生真面目で優しすぎて、気付こうとしなかった、ようですけど」

気付こうとしなかった。

気付いた。

何を。

「死ぬ気ですか」

「そうね」

自分でも理解できないほど。

自分でも意識しないほど。

答えた声は冷酷だった。

彼女の怒りが、爆発した。

「イヴァさんが、ロゼさんが、あれだけフェオさまのことを大事に思ってるのに、どうしてそういうことするんですか！？ あたしなんて目じゃないくらい、フェオさまのことが好きで、大切に、守りたくて、そういう気持ちをなんであつさり踏み潰せるんですか！？」

その怒りに、私は残酷に突き放した。

「……好き？ 大切？ 守りたい？ 大事？ そんなわけないでしょうが。憐みと、同情と、義務と、頼まれて、仕方なしに、嫌々。そんなとこ。それ以外の何でもないわよ」

「そう思い込もうとしてるんです！ そんなにみんなが嫌いなんですか！？ そんなに自分が嫌いなんですか！？」

「嫌いよ。大っ嫌い。決まってるでしょ。みんな、みーんな、だいたい」

「なら、なんで泣いてるんですか！」

「っ」

言われて。

……気付いたわけじゃない。

そんなこと、気付かないわけがない。でも。

私は、ついに振り向き、怒鳴っていた。

「泣いてるわよ！ 悪い！？ 昨日一日中、ずっと怖い目に遭って、なのに私はなんにも出来なくて、ずっとあんな達に縋って縋って縋って！ 自分から縋ろうとしたはずなのに、惨めで情けなくて一人で勝手に八つ当たりして、一人で勝手に落ち込んで、一人で勝手に迷惑かけて！」

本当に、惨めで、情けない、負け犬。

とうとう、こんな醜い内側を晒してしまった。もはや、隠しきれないほど暴き出してしまった。

もう、止まらない。

「こんな人間なんて、私なんて、とつと死ぬべきなのよ！」  
そして。

バチンっ！

何ということはない。ただ単に、イルマが私をぶったのだ。それはそうだろう。私の言っていることが無茶苦茶だからである。激怒するのも無理はない。

頬が痛かった。目も痛い。びっくりするほど泣いていた。鼻水まですでに出てた。

たった一日、周りから魔法をぶつけられ、からかわれただけで、ごらんの有様である。大げさにもほどがあり過ぎる。引きこもり負け犬の精神力は、ナノサイズ。

と。

「……やっと……本音を言いましたです」

ぶたれて顔を下げた、私の耳に入っただのは優しいイルマの声。

「……………え」

ふと、視線を上げた私の目に映るのは、本当に満面の笑みを浮かべた彼女の顔と。

……はらりと、落ちたタオルに隠された、舐めやかしい女の子の

裸。

「……………あー」

潤んだ視界で、じつくり、上から下まで眺めて。それから自分の方も見やる。やはりタオルは外れていて、白い艶やかな肌が全て露出していた。そちらも一通り視姦して。

「満点。文句なし」

呟いた瞬間、決定的な何かが外れて、いきなり視界が赤く染まった。それが鼻血だと気付いた時には、私は気を失っていた。

その後、私が目覚めたのはきっかり一時間後。イルマにパジャマを着せられて、ベッドに横たわつての目覚めだった。このパターン、二度目である。

それで今、夕食も終えた私達は、作戦会議をしているのであった。「フェオさま、前も言いましたけど、魂アニマがない、なんてありえないんですう！」

「……………そう言われても、実際、私まったく使えないし」  
ややふて腐れたような口調になってしまう。

「そう思い込んでるんじゃないですか？」

言いながら、同じベッドの隣に腰掛けたイルマちゃんが、ずいつ、と私の顔の前に身を乗り出してくる。

「お、思い込む？ て、ていうかイルマちゃん、近いんだけど……………」

「魔法というのは、まず信じるのが大事なんです！ 自分が魔法を使える、世界が生命アニマに満ちている、身体に魂アニマがあるって、信じなければダメなんです！」

「……………そ、そうなんだー。イ、イルマちゃん、離れてくれない、かな？」

次は私の身体にのしかかって、押し倒してくる。あの風呂場以降、

完全に力関係が逆転していた。

「　　って、わぁあっ!? ボタン取るなぁぁ!」

押し倒して、勝手にパジャマのボタンを外し初めていた。押し返してみるものの、完全魔法強化中。　　この子やつぱり、ずっと関節技わざと受けてたみたいです。それでさっきから趣向が変わったようです。その、待ちから攻めの、な?

「まずはその一環として、性感に身を悶えさせて、ちゃんと生きていることの実感を得て貰おうと思います!」

「ええっ!?　なにそれ意味わかんないし!　全然あなたの欲望丸出しだし!」

「ほら、人間って食欲、睡眠欲、性欲の三大欲求みたいなのあるじゃないですか。そのうちの一つを活性化させて『生きてるよー!』っていうのを確かめて、『おお、私魂<sup>アニマ</sup>あつたんだー!』ってなるわけです!」

「ならないわよっ!」

イルマちゃん、完全に暴走していた。よっぽど私が鼻血出して倒れたのが嬉しかったらしかった。ようするにこの子、私がそっち方面OKだと確信したみたい。

……実際どうなんだろう。これ、昨日も考えた気もするけど。

まあともかく。

私、死ぬ気で抵抗していた。

「いにやあっ!　イルマちゃん、やめて!　お願いしますやめてください!　やめろって言ってんだろーがこのガチレズ女ぁぁっ!」

「おお!　いいです!　男口調フェオさまいいです!　そります!　お嬢様ヤクザって新しい世界の可能性が見えました!」

「うるさい、見なくていいわよ!　って、あ、やめて、脱がすな、本当、まじで、お願い　舌かむ!　それ以上脱がしたら舌嚙んで死んでやる!」

そこまで言って、やっと諦めてくれたイルマちゃん。「ぷう!」

仕方ないですう」となぜか私が悪いみたいな言い方をしながら、やっと離れてくれた。

「まあ、でも、信じるのが大事なのは本当ですよ？　学校でも一番初めに言われることなんですよ」

かなり息を切らしながら、身なりを整える私とは打って変わり、

息一つ切らず、平然と彼女が言う。

「魔力<sup>アニメ</sup>つて目に見えないですから。見えないものを信じる、ってところから始めるんですう」

「……ふーん……」

そんなこと、初等で言ってたっけ。私、つくづく昔から授業とか聞いてなかったんだなあ、と感心してしまう。

「やっぱり、この『信じる』ってのが一番フェオさまに足りないものだと思いますです！」

いきなりテンションマックスで、勢いよく立ち上がり決めポーズを取る。私は半眼でその様子を眺めていた。

「魔法を信じる！　魔力<sup>アニメ</sup>を信じる！　魂<sup>アニメ</sup>を信じる！　自分を信じる！　世界を信じる！」

一つ一つポーズング。ベッドがぎしぎし言ってるので、やめて欲しかった。

「ねえ、それは分かったんだけど、呪文を覚えてみるっていうのはどうなったの？　灼熱玉<sup>ファイヤ・ボール</sup>の呪文」

夕食時に提案していたことを訊ねると、ぴたっ　とポーズしたまま静止し、それからばんっ　とベッドから飛び立ち、即座に自分の鞆から教科書（呪文とか乗ってるやつ）を取り出して、一瞬で元の位置に戻ってきた。

……忘れてたな。

「さ、さあ、今日は一晚中付き合いますよ！　完全完璧に、寝ていても口ずさめるようにマスターしますです！」

取り繕うように、またテンションを張り上げるイルマちゃん。

「……まあいいけど」

一人ごちて、彼女が突き出してきた教科書を一緒に眺めるのだ  
た。

イルマちゃんに聞くと、受け取られた時点で受理されており、も  
はや撤回は出来ないらしい。なら、せめてもの抵抗として、魔法を  
使えるようにと悪あがきをしているのである。

それにただそれだけというわけじゃない。私は、これ以上惨めな  
自分を晒せるほど、精神的に強い人間では、どうやらなかったらし  
い。よくこれで、初等の時は頑張れたものだと思ってしまう。

負け犬、一世一代のイカサマされ賭博。勝てば人間。負けれ  
ば死。

「ごめんね……イルマちゃん……イヴァ、ロゼ……」

私はこれまで、いや、今だって、他人の気持ちなど、本当にしっ  
かりと考えたことはない。

でも、憐みと、同情と、義務と、頼まれて、仕方なしに、嫌々だ  
としても、私が死ぬことで、みんながよい顔をするとは、さすがに  
思えなかった。

結局私は、一日中命の危険を感じた、はたまたイヴァが私を憐れ  
んでいた、その腹いせをただけなのだ。つくづく、ひねくれ者で、  
我が儘なお嬢様である。

「信じる、か」

独り言を言いながら、私のベッドで寝てしまった彼女に布団を掛  
ける。呪文を覚え終わった頃には、もう日は顔を出しかかっており、  
窓から青白いぼんやりとした明かりが差し込んでいた。

「魔法を信じて、魔力<sup>アニメ</sup>を信じて、魂<sup>アニメ</sup>を信じて、自分を信じて 世  
界を信じる」

なんだかんだで、このフレーズ、気に入ったみたいだった。勝手



に口づさんでいたりする。

まあそれはともかく。

これ以上感傷に浸って、一層寝不足にでもなり、明日の決闘どころでは無くなったら笑い話にもならない。

私は自分のベッドから腰を上げ、イルマのベッドに倒れこむようにして。

やはり眠かったのだろうか、あっという間に眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7659q/>

---

生まれ変わっても負け犬

2011年2月26日13時56分発行